

チベット訳『梵天所問経』—和訳と訳注(6)

五島清隆

1 はじめに

本稿は、五島 [2009][2010][2011][2012] [2013] の続編であり、全六巻のうちの第六最終巻の和訳と訳注である。校合に用いた写本大蔵経 (B: パタン, K: 河口慧海将来本, L: ロンドン・シェルカル, Ph: プタク, T: トク・パレス) と版本大蔵経 (C: チョネ, D: デルゲ, H: ラサ, N: ナルトン, P: 北京) の詳細に関しては、五島 [2009] を参照願いたい⁽¹⁾。

先の第五巻の末は、不退転天子による「師子吼」に関する教示と、それによって引き起こされた奇瑞と世尊の微笑とで終わっていたが、この第六巻はそれを受けて、ヴィシエーシャチンティンによる世尊の微笑の理由を問う詩頌から始まる。世尊の微笑の際に口から放たれた光は最終的には世尊の頭頂に消えるのであるが、これは世尊がこれから未来時における無上正等覚の授記を語り出すことの予兆であり⁽²⁾、不退転天子への授記が語られる。授記を受けた不退転天子は堅固精進 (= 「無活動の活動」) を説くが、それは世尊がかつて実践したものであり、それによって世尊は燃灯仏から授記を得たのだと明かされる。マハーカーシャパ (大迦

(1) このほか、本稿で用いる符号、記号、諸形式などについても前稿までのそれらに準じている ([2009] 142-143 頁参照)。なお、脚注番号の指示する箇所が比較的に長い場合、その範囲を明確に示すために、(1)→、←(1)としている。この番号は、当該範囲の最後にくるべき番号で示される。また、今回は『中華大蔵経・甘珠爾』(蔵文版対勘本、全 108 冊、2008 年) の第 59 冊所収の本経相当部分 (62-269 頁) も参照した。この大蔵経は 5 版本 (CDHNP) の他、ユンロ (永楽) 版、リタン版、ウルガ版の異説を挙げているが、5 版本のいずれかに見られるものばかりなのでいちいち言及することはしていない。ただし、活字で印字されており参照するには便利と思われるので、その頁数 (本経第六巻は 214 頁 12 行目~248 頁最終行) を北京版 (P) の丁数とともに挙げておいた (Zh と表記する)。

(2) 世尊の放光には決まり (dharmatā) があり、世尊が過去のことを説明する場合は世尊の背後に入って消え、未来のことを説明する際には前に、地獄への再生を予言する場合は足の裏に、餓鬼への再生の場合は足の親指、人間への再生の場合は膝に、強力転輪聖王 (balacakravartin) の地位を予言する場合は左の掌に、転輪聖王の地位を予言する場合は右の掌に、声聞の場合は口 (āsya) に、独覚の場合は眉間 (白毫*ūrṇā) に、無上正等覚を予言する場合は頭頂 (mūrdha, 肉髻 uṣṇīṣa) に消えてゆく (*Divy* 42.1-9)。

葉)は、この教説を菩薩への法雨と考えるが、それを受けて世尊は散文(長行)と詩頌によって菩薩たちの徳を大海に喩えて称讃する。その後、ヴィシェーシャチンティン、マンジュシュリー(文殊師利)、会中のヴィマラケートゥ(浄相)天子によって、この經典の功德の称讃と広宣流布が説かれる。ヴィマラケートゥ天子は、この法門をほんのわずかでも聞かならばたとえ如来から授記されていない人たちでも自分たちが授記を与え、その言葉によって、この天子自身が世尊より授記を受け、さらに五百の菩薩たちも授記を受ける。マンジュシュリーによりこの教法の久住を要請された世尊は、そのために、法師を守護する明呪・マントラ句を教示する。それを聞いて四天王は驚愕し、自らも法師たちを守護することを約束する。さらに、シャクラ神、ブラフマー神、マーラ・パーピーヤスも法師の守護を約束する。最後に世尊がこの経の受持と広宣流布をアーナンダ(阿難)に委嘱してこの経は終わる。

内容的には、次の3点が注目される。

(1)「無実践の実践」「不聞の聞」「無活動の活動」

対立する二項あるいはその関係への執着を超えるのが「空・不二」の立場であり、これは本経の主要テーマの一つであるが、その説き方は巻を追う毎に微妙に変化してきている。それを具体的に概観してみよう。まず、III-2節では「輪廻と涅槃の二つの想を超越すること」「諸法の平等性」が説かれ、IV-2節では、「諸法は、[本来]虚妄なものであり、[そこには]真実も虚偽もないのであるから、私は、世間を超える法を不二として説くのである(19)」とされているが、これらは不二の基本的な立場(定義)を示したものである。

これに対し、たとえば、IX-2, 3節では「一切行(*caryā)の非行」「一切説(*prajñapti)の非説」が説かれ、それぞれ、どのような行も法界の増減には無関係であるからであり、一切の説は比喩的表現(*upacāra)だからであるとされている。さらにXV-3節では「行(*caryā)が非行であること、それが六波羅蜜を行じることである」とされ、XXXI-1節では「一切の法を実践(*pratipatti)しないことが法の実践である」とされている。この第六巻においても、XXXIII節では「住しないことが梵行に住すること」「あらゆる法を修習しないことが道の修習」、XXXIV-1節では「身体的にも言語的にも心理的にも活動のないことが精進の実践(*ārambha)」、XXXIV-2節では「すべての法を実践(*ārambha)しない(身体的・言語的・心理的活動に依拠しない)実践」が説かれている。これらを総括すると、本経では「一切の行動をしないこと、身・口・意の活動をしないことが正しい行動・活動である」と主張していることになるであろう。

とりわけ、XXXVI-2節では、法師(*dharmabhāṅaka)とその聞法者との関係から「不聞の聞」が強調され、ここで示される「聞かないというあり方で聞く(thos pa med pa'i tshul gyis thos, *āśraṇayogena śraṇam)」という表現は特に注目される。これは「見ないというあり方で見る(*adarśanayogena darśanam)」「不見の正見」という、後代のたとえば『法

集経』や中観派の文献において用いられる重要な用語に繋がる表現だからである⁽³⁾。本経では、XVIII-2節に「見ている限り虚偽であるから、見ない人が真実を見る」⁽⁴⁾とあるほか、「行動を起こさない者が正しく行動する者(正行者)である。清浄なる慧眼は、有為も無為も如来も、何ものをも見ることはない」(XX-2節)、「現観とは一切法を見ないことである。二〔想〕を離れているから見ないのであり、不見が正見なのである」(XXV節)とある。

(2)「授記」

授記は、伝統的には、仏陀のもとで様々な供養(身業)や誓願(口業・意業)を行った者に対して将来の成仏を保証するものとして与えられるものであったが、大乘仏教では、それぞれの経典が主張する教説の真実性を保証する手立てとして授記という手法が用いられている。たとえば『法華経』では、たとえ現在は声聞であっても過去世において既に菩薩として身・口・意の行を実践していたとして、あるいはかつて『法華経』の教説を聞いていたとして、それを根拠に成仏が可能であるとし、いわばその真実性の保証として具体的な成仏の予言がなされている。

これに対し、本経の授記の特徴は、供養や梵行や六波羅蜜などの身・口・意の活動(つまり一切行)の超越を強調し、それを「不行の行」「無実践の実践」つまり「無活動の活動」と表現している点にある。この点に関して、本経 XV-4, 5節において詳細な問答がなされているが、それがこの第六巻所載の XXXIV-2節において釈尊の燃灯仏からの授記に関連して要約して再説されている。それによれば、釈尊は多くの如来のもとで、尊敬・供養し、梵行・頭陀行を実践し、布施・持戒・忍辱・精進を実践し、如来がたの名を一劫にもわたって唱えたが、授記は与えられなかった。それはひとえに身口意の三業に依拠していた(とらわれていた)からである。一切の行(修行, 実践, 活動)を超越したとき、燃灯仏によって授記が与えられ、その後、六波羅蜜の行は完成したのである。この「無実践の実践」「無活動の活動」が、XXXIV-1節で強調される「菩薩の堅固精進の鎧」の内容なのである。

さらに、特筆すべきはヴィマラケートゥ天子と授記の関係であろう。彼は、「無活動の活動」を説くこの法門をほんのわずかでも聞くなら、如来から授記されていない人であっても自分たちが授記を与え、その言葉によって、彼自身が如来から授記を受けるが、彼は「自分は悟りを求めず、願わず、喜ばず、執着せず、見ず、考えず、理解せず、考察することもないの

(3) 『法集経(Dharmasamgītiśūtra)』の当該箇所(「諸法の見不見が見であり正見である」)やこれを経証とするカマラシーラの主張については一郷[2011]36-37頁参照。

(4) この部分は清弁の『大乘掌珍論』に引用されている(五島[2012]131頁注38)。同じ清弁の『中観論頌』第4章第21詩では八聖道の「正見」「正思」以下の八支を「不見」「不思」などと規定し、活動しないことこそが正しい活動であるとしている。詳細はEckel[2008]79-80頁を参照。また、「不見の見」の発想は羅什訳『維摩詰経』「文殊師利問疾品第五」の「不來相而來、不見相而見」にも反映していると思われる。この点に関してはKatsura[2015]が参考になる。

に、なぜ授記を受けることができたのか」と問い、世尊から「悟りを喜ばず、執着せず、見ず、欲せず、願わず、考えず、考察しない菩薩（つまり、無自覚のうちであれ、「無活動の活動」をしていた菩薩）に如来がたは授記をする」という答えを得る。この問答を聞いていた五百の菩薩たちは「自分たちも、天子と同じように悟りを喜ばず、執着せず、見ず、欲せず、願わず、考えず、考察していないのに、なぜ授記を受けることがないのか」と問い、世尊の威神力によって、多くの如来がたから授記を受ける。「無活動の活動」（より正確に言えば「無活動というあり方で活動すること」）の称讃はここにおいて絶頂に達する。

(3) 「明呪・マントラ句」

大乘經典の多くはその經典の末尾部分に、經典あるいは經典の護持者（具体的には經の信奉者および信奉者を指導する法師 dharmabhāṅaka）を守護する呪句を配置している。この呪句は、一般に「陀羅尼 (dhāraṇī)」と総称されるが、その内実・歴史については氏家 [1987] が特に詳しい。ここではその所論を踏まえて、本經の特徴を確認することにしよう。

まず、呪句の名称であるが、『法華經』などの他の經典では多く「陀羅尼・マントラ句 (dhāraṇī-mantrapada, 陀羅尼というマントラ句)」としているのに対して、本經では「明呪・マントラ句 (*vidyā-mantrapada)」としている。「陀羅尼」の語は本經には8例しか見られず、「陀羅尼 (保持する力) を得ることによる聞 [法] という蔵」(XXXVIII 節) とあるように、「法を聞きそれを記憶・保持する力」という意味の、『阿闍世王經』など初期大乘經典に多く見られる用例と同じである⁽⁵⁾。本經で説かれる呪句はあくまで「明呪 (vidyā) (という) マントラ句」であり、これを「陀羅尼」と見る視点は本經には見られない。

次に呪句の形式・内容であるが、この点では『法華經』などのそれとさほど変わらないが、後半部に意味の読み取れる句が比較的多く置かれていることは特徴といえるかも知れない。「マントラ句 (真言句 mantrapada)」の特質は、意味のないこと (無義) にあり、これは諸法の空・無自性を象徴するものであるが、末尾の部分において羅什訳 (高麗版) が音訳とともに意識を挙げていることから看取できるように、後半部は内実のある祈願の言葉となっている。割注によれば、流支訳 (Ch3) では全体を四十句とみているが、羅什訳 (Ch2) では、意識の始まる前までを二十六句としており、羅什訳割注は意識が存在する部分を呪句とは切り離して見ている可能性がある。

この呪句は「神々、ナーガ (龍)、ヤクシャ (夜叉)、ガンダルヴァ (乾闥婆)、アスラ (阿修羅)、ガルダ、キンナラ、マホーラガ、クンバーンダを呼び出すもの」と名付けられ (XXXVII-1 節)、四天王の眷属たるこれら「八部衆」やクンバーンダを招請し、彼らによる守護を約束する

(5) I-1, VI-7, VI-9, XV-1, XXIX-1 (2例), XXXVI-3 の各節に見られる用例も殆ど「三昧」「樂説 (弁才)」の語とともに列記されたもので、意味はすべて「總持・聞持」の原義を保っており、呪句との結びつきは見られない。

ものである。もっとも、法師やその聞法者（つまりこの法門の信奉者）たちに付け入る邪悪なもの代表は一般的にはマール・パーピーヤス（魔波旬）であり、この經典によれば「神々、ナーガ、ヤクシャ、クンバーンダ」(XXXVII-3 節)なのであるから、もっとも邪悪なものに逆に守護者にする力がこの呪句にあるということになる（マール・パーピーヤスも世尊の神通によって、説法者・聞法者を魔の仕業から守護することを約束している）。呪句自体の中にも、「そこにはあらゆる鬼神 (*bhūta-grāha) がおられます (Ch2: 此中住召一切諸神)」とあり、「そこ」とはおそらく呪句、あるいは呪句朗誦の場を指していると思われる。

本經では、呪句を含む XXXVII 節において、四天王やシャクラ神、ブラフマー神たちによる守護を約束する言葉の他に、ヴァイシュラヴァナ（毘沙門天）の息子（サットヤチャンドラ）とシャクラ神の息子（ゴーパカ）によって法門の受持と宣教の誓願が述べられ、彼らに対して世尊から授記が与えられている。

2 和訳と訳注

第六最終巻

(XXXII-2) 微笑の理由

そのとき、ブラフマー神であるヴィシェーシャチンティンは、以下のような詩頌によって世尊を称讃した。

- 1 彼岸に到達した勝れた知を持ちすべてを圧倒する一切知者たる牟尼よ、三世の有情の様々な行動がどのようなものであるか、何が真に解脱する智の領域なのか、〔有情たちの〕意向がどのようなものであるか、この点についてあなたは [P91a] よくご存知です。神々の主である一切知者よ、この微笑みの理由をご説明下さい。
- 2 思議を超えた無辺の仏陀の知は、尊敬に値する汚れなき声聞・独覚たちにも及ぶことのできない領域のものです。(6)→ あなたにはおよそ障碍というものはなく ←(6), (7)→ 有情の行動や、どういう有情にどのような話をする〔べき〕かをご存知です ←(7), (8)→ 優れた話者・牟尼・難解な言葉の支配者よ ←(8), どうか、微笑まれた理由をご説明下さい。
- 3 〔世尊の口から生じた〕この光はとても [Zh215] 心地よく好ましく汚れなく、(9)→ 清らかに輝いています ←(9)。太陽や月、また、ブラフマー神やシャクラ神の光輝をも圧倒し

(6) Tib: khyod la chags pa med. Ch1: 持無限. Ch2, 3: 無障礙.

(7) Tib: khyod kyi sems can spyod pa sems can(B: gzhan gyi spyod sems, Ph: gzhan gyi gnod sems) gang la ci 'dra'i gdam brjod mkhyen. Ch1: 曉了衆生心 何因說所趣. Ch2: 知衆生心隨應(意) 說. Ch3: 隨應說法稱根性.

(8) Tib: smra mchog thub dka' tshig dbang. Ch1: 殊勝難可當. Ch2: 最上尊. Ch3: 最勝無上尊.

(9) Tib: rab tu rnam par mdzes (*virājate). Ch1: 從意之所樂 善拘(句) 懷除穢. Ch2: 佛光可樂淨無穢. Ch3: 善(舌) 淨無垢月光明.

ています。また、〔この光で幾〕ナユタ〔もの数〕の鉄圍山やスメール山など〔の山々〕も明瞭に見えるようになっていきます。どうしてあなたは微笑まれたのでしょうか、その理由をよくご説明下さい。

- 4 慈しみの主よ、あなたは貪り、怒り、高慢などの〔煩惱の〕矢から離れて寂靜であります。世間のものは、神々も人間もマホーラガの集団も、〔あなたの〕お顔を見つめています。スガタ（善逝）を見ることに飽きることもなく、身体も快適で喜びに満ちています。この微笑みの理由についての説明を、牟尼よ、私たちにお説き下さい。
- 5 あなたは、諸法が虚空のようであり、常に作用はなく、空虚であり（*tuccha）、稲妻や雲の如きものであり、幻のようであり、水泡の如く虚ろであり、〔夢から覚めた者にとっての〕夢の中で見たことや、中に何も無いのにあるかのように見せている拳（*riktamuṣṭi）⁽¹⁰⁾の如くであり、虚空や水面〔に映る〕月の如きものであるとご存知です。この微笑みの理由を耳に心地よいお言葉でお話し下さい。
- 6 あらゆる執着・構想・分別から離れることで空性を信解し、⁽¹⁾¹→ 主体（能知）・客体（所知）への構想からすべて離れ←⁽¹¹⁾、常に無相ということを喜んで（*anumoda）おられます。あなたはこの世の三つの生存状態（三有）のいずれをも願わず、禪定や三昧を喜んでおられます。何故に微笑みをお示しになられたのか、導師よ、その説明をなさして下さい。
- 7 音声（*svara）に執着なさらず、語（*śabda）・文（*vyañjana）・文字（*akṣara）にも同じように〔執着なさいません〕。世間において法を説く清浄なる知の持ち主は、我（*ātman）と法（*dharma）とに依拠することはなさいません。集まった人は、それぞれが、[P91b]「スガタ（善逝）は私に対して個別に法を説いておられる」と理解します。⁽¹²⁾→ 勝れた広大な知である〔六〕神通、〔五〕根・〔五〕力を備えた方よ、無比の智慧を備えた方よ、〔微笑まれた理由を〕お話し下さい。←⁽¹²⁾
- 8 あなたは、全ての苦を除いて老と死〔という病〕を制圧する最上の医者です。あなたは勇者であり、魔の勢力を制圧し、ナーラーヤナ神の威力をお持ちです。あなたは救済者、[Zh216] 究極の拠り所⁽¹³⁾、世間の守護者、帰依所、〔法という〕灯火を輝かす者です。〔そのあなたに〕アスラ・デーヴァ・ナーガが礼拝供養しています。微笑みの理由は何なのか、この点についてご説明下さい。

(XXXIII) 不退転天子への授記

このように要請されて、世尊はブラフマー神たるヴィシエーシャチンティンにこう仰せにな

(10) Cf. 『増一阿含経』：亦如野馬幻化虚偽不眞。亦如空拳以誑小兒。（Taisho No.2 638c6-7）

(11) Tib: bdag po shes bya kun la rtog bral.

(12) Tib: ye shes rdzu 'phrul dbang po stobs mchog rgyas pa shes rab mtshungs med gsungs. Ch1: 知神足根力 最勝善哉説。Ch2: 願神通智説笑縁。Ch3: 智通根力皆具足 華光智慧爲我說。

(13) Tib: dpung gnyen(*parāyana). Ch2: 究竟道。Mvy.1743.

られた。「ブラフマー神よ、汝はこの不退転天子を見ているか」

〔ヴィシェーシャチンティンが〕申し上げる。「世尊よ、見えています」

〔世尊が〕仰せになる。「ブラフマー神よ、この不退転天子は三百二十万劫後に、『巧みに化作された』⁽¹⁴⁾という世界、『ブラフマー神によって称讃された』⁽¹⁵⁾という劫において、無上正等覚を悟るであろう。『スメール山を灯火とする王』⁽¹⁶⁾という名の如来・応供・正等覚・明行足・善逝・世間解・調御丈夫・無上士・天人師・仏陀・世尊として世に現れるだろう。その仏国土は、瑠璃と閻浮提金 (*Jambūnadasuvarṇa) という二種の宝石を大地としている。そこには、菩薩の僧団のみが生じるであろう。悪魔や敵対者は退治され、勇者のみ〔がいるであろう〕。⁽¹⁷⁾→ その仏国土では、食べ物や飲み物は願うだけで得られ、トゥシタ (兜率天) 〔にある素晴らしい〕財物と同じようになるであろう ←⁽¹⁷⁾。かの如来は無量の寿命を持ち、瑕疵のない法を説くであろう」

⁽¹⁸⁾→ ヴィシェーシャチンティン (V) が言う。「天子よ、如来はあなたに授記なされたのですか」

〔天子 (D) が〕言う。[P92a]「ブラフマー神よ、わたしは、真如 (*tathatā) や法界 (*dharma-madhātu) と [Zh217] 同じように授記されています」

〔V が〕言う。「天子よ、真如や法界は授記されません」

〔D が〕言う。「真如や法界が授記されないようにすべての菩薩への授記も同様だと、そのように見るべきです」 ←⁽¹⁸⁾

〔V が〕言う。「⁽²⁰⁾→ 天子よ、⁽¹⁹⁾→ それでもたった今あなたは ←⁽¹⁹⁾如来によって授記されたのですから、あなたが正等覚者たちのもとで梵行に住していた (*sthita) ことは無意味ではなかったということです ←⁽²⁰⁾」

〔D が〕言う。「ブラフマー神よ、住しないことが梵行に住することなのです」

〔V が〕言う。「天子よ、それでは、何に住しないことが梵行に住することなのです」

〔D が〕言う。「ブラフマー神よ、三界に住しないことが梵行に住することです。⁽²¹⁾→ ブラフマー神よ、誰であれ、三界に住する人は、梵行に住していません。←⁽²¹⁾ さらに、ブラフマー神よ、我 (*ātman) に住しないこと、魂 (*sattva) ・生命 (*jīva) ・個体 (*pudgala)

(14) Tib: legs par sprul pa(*Sunirmita). Ch1,3: 善化, Ch2: 妙化.

(15) Tib: tshangs pas bstod pa (*Brahmapraśāṅsā). Ch1,2,3: 梵歎.

(16) Tib: ri rab sgron ma'i rgyal po(*Sumerupradīparāja). Ch1,2,3: 須彌燈王.

(17) Tib: btung ba'ang bsam pa tsam gyis 'byor cing dga' ldan gyi longs spyod dang 'dra bar 'gyur ro. Ch1: 所居室(屋) 宅衣食被服, 當如第六化自在(應聲) 天. Ch2: 所須之物應念即至. Ch3: 所須之物應念即至如兜率天.

(18) ほとんど同じ内容の問答が既にヴィシェーシャチンティンとジャーリニープラバとの間で交わされている (XV-3, 五島 [2011]218 頁).

(19) CDHN: de'ang da khyod. BKLPh: de ltar khyod. P: de ltar khyod de ltar.

(20) 3 漢訳は藏訳とは表現の仕方が異なる。代表例として Ch2 の訳を挙げておく。「もし如来があなたに授記しないのであれば、それは、あなたが過去の諸仏のもとで無駄に梵行に住していたことにほかなりません」

(21) 3 漢訳はこの部分を欠く。

に住しないことが、梵行に住することです。ブラフマー神よ、要するに、⁽²²⁾→ あらゆる法に住しないこと ←⁽²²⁾ が梵行に住することなのです」

〔V が〕言う。「天子よ、梵行に住するとは何を意味することば (*adhivacana) ですか」

〔D が〕言う。「梵行に住するとは、ブラフマー神よ、⁽²³⁾→ 不二の道に確立している (*pratiṣṭhita) こと ←⁽²³⁾を意味することばです」

〔V が〕言う。「天子よ、道に確立するとは、また、何に確立するのですか」

〔D が〕言う。「ブラフマー神よ、道に確立するとは、あらゆる法に確立しないことを意味する言葉です。なぜなら、⁽²⁴⁾→ 確立することなく、取著することもないことが、道に確立することだからです ←⁽²⁴⁾」 [Zh218]

〔V が〕言う。「天子よ、どのように修習すれば、道の修習になるのですか」

〔D が〕言う。「ブラフマー神よ、存在 (*vastu) にも非存在にも決して陥ることなく、いかなる法をも存在と [P92b] 見なさず非存在とも見なさない、とそのように修習するならば、道の修習に努力しているのです」

〔V が〕言う。「天子よ、どのようなことによって道を修習するのですか」

〔D が〕言う。「ブラフマー神よ、見ることによってではなく、聞くことによってではなく、憶念することによってではなく、認識することによってではなく、獲得することによってではなく、直証することによってではなく、です。⁽²⁵⁾→ あらゆる法を修習しないことが、道の修習なのです ←⁽²⁵⁾」

(XXXIV-1) 菩薩の堅固精進

〔V が〕言う。「天子よ、どのようにすれば、菩薩は、精進という堅固なる鎧 (*dṛdhasaṃnāha) を身に着けることになるのですか」

〔D が〕言う。「ブラフマー神よ、もし菩薩が、いかなる法であれ、一なるもの (一相) としても種々なるもの (異相) としても見ないのであれば、それを精進という堅牢なる鎧を身につけた菩薩というのです。⁽²⁷⁾→ 法界に関わる ⁽²⁶⁾ことがないので、いかなる法も分離させることはなく、結合させることもありません ←⁽²⁷⁾。⁽²⁸⁾→ [自ら] 法界に関わることなく、煩惱や清浄を見ることもないこと ←⁽²⁸⁾、それが菩薩の精進実践 (*vīryārambha) の極致です。

(22) Ch1: 假於諸法, 不習諸法. Ch2,3: 不住法, 不住非法.

(23) Tib: gnyis su med pa'i lam la rab tu gnas pa. Ch1: 不住二道. Ch2, 3: 住不二道.

(24) Ch1: 無所立者則爲賢聖之所遵修而得超度. Ch2: 衆賢聖無所住, 不取於法能度諸流. Ch3: 以衆賢聖皆無所住, 不取於法不度諸流.

(25) Ch1: 於一切法而無所行. Ch2,3: 於一切法無相無示.

(26) Tib: 'dres pa (*saṃsṛṣṭa). 'dre ba には「混じる、関わる」の意があり、ここは法界と様々な形で関わりをもつこと、干渉することを指していると考えられる.

(27) Tib: gang chos kyi dbyings ma 'dres pa'i phyir chos gang la yang 'byed par mi byed, sbyor bar mi byed de. Ch1: 設於法界而無所壞, 已無所壞則無所近亦不離法亦無所逮(違). Ch2, 3: 於諸法不壞法性故, 於諸法無著無斷無增無減.

(28) Tib: chos kyi dbyings ma gtogs par kun nas nyon mongs pa dang rnam par byang ba mi mthong

(29)→ あらゆる法を除去することも確立すること (*sthāpana) もないことが、精進の実践です。←(29) ブラフマー神よ、身体的にも言語的にも心理的にも活動のないことが、精進の実践なのです」

(XXXIV-2) (30) 「無活動の活動、無実践の実践」と燃灯仏による授記

その時、世尊は、不退転天子に「素晴らしい」という言葉を与え、ブラフマー神たるヴィシェーシャチンティンに〔こう〕仰せになられた。「ブラフマー神よ、この天子が説き示した通りである。これが、彼の精進実践の極致である。身体的にも言語的にも心理的にも活動が [Zh219] ないことが、精進実践の極致である。

ブラフマー神よ、私は思い出すのだが、過去において、頭陀行 (*dhūtagaṇa) という厳しい節制 (*saṃlekha) をすべて行うという精進を実践したにもかかわらず、如来たちは、無上正等覚への授記を与えて下さらなかった。同じように、(31)→ 師匠 (*guru) たちに対して恭敬し [P93a] 供養 (*satkāra) すること ←(31)、人気のない所 (*araṇya) に住すること、多く聞くこと、有情にとって必要な物のすべてに応じる (*sarvatraga) ことなどの精進を実践したのに、私は授記を与えていただけなかった。なぜなら、それは、そのように身体的・言語的・心理的活動に依拠していた (*pratiṣṭhita) からである。ブラフマー神よ、私がこの天子の言った通りにそのような（「無活動の活動」という）精進の実践を身に着けた後に、燃灯 (*Dīpaṃkara) 如来によって『バラモンの青年よ、汝は、将来、釈迦牟尼 (*Śākyamuni) という名の如来・応供・正等覚となるであろう』と授記されたのである。ブラフマー神よ、それ故、授記の段階 (*bhūmi) に速やかに到達したいと思う菩薩は、このような精進の実践、つまり、すべての法を実践しないというこの精進の実践をするべきなのである」

(XXXIV-3) 三世の平等性

(33)→ [ヴィシェーシャチンティンが] 申し上げる。「世尊よ、実践のない精進とはどのようなものなのですか」

〔世尊が〕仰せになる。「ブラフマー神よ、三世の平等性 (*tryadhvasamatā) (32)を備えていることが、精進の実践である」←(33)

ba. Ch1: 不見塵勞亦無結恨. Ch2,3: 不見垢淨出過法性.

(29) Tib: chos thams cad la bsal ba dang bzhag pa med pa. Ch1: 不舉不下於一切法奉修精進. Ch2,3 はこの部分を欠く.

(30) この XXXIV-2 節は、同じく燃灯仏による授記が述べられる XV-5 節 (五島 [2011]219-221 頁) と深い関係にある。ただし、ここでは「一切の行 (caryā) を超越した」菩薩に対する授記であるが、ここでは「実践しないという実践 (ārambha) を行う菩薩に対する授記であり、前者より一段進んだ論になっている。

(31) Tib: bla ma rnam la ldang ba dang rim gro bya ba. Ch1: 恭敬奉事. Ch2: 於諸師長供養恭敬. Ch3: 供養諸佛恭敬尊重. 蔵訳の ldang ba (*pratyuṭthāna) は、3 漢訳から見て「客人を迎えるために立ち上がること、敬意を込めた挨拶」の意であろう。

(32) Ch1: 究竟平等正均空無. Ch2 三世等空, Ch3 三世平等. なお、BP XXVII-2 節では、一切法の平等性に関連して「三世清淨・三輪清淨」が説かれている (五島 [2013]105 頁および注 113 参照)。

(33) Ch3 はこの部分を欠く。

〔ヴィシェーシャチンティンが〕申し上げる。「世尊よ、三世の平等性を備えた精進の実践はどのようなものなのですか」

〔世尊が〕仰せになる。「たとえば、過去の心は滅してしまっている。未来〔の心〕はまだやって来ていない。現在〔の心〕は住することがなく、^{(34)→} 認識の対象となることもない ^{←(34)}。[Zh220] ^{(35)→} 滅してしまったものは認識の対象とはならない。 ^{←(35)} ^{(36)→} まだやって来ていないものは生じるという特徴を持たない ^{←(36)}。同様に、現在もまた、法性 (*dharmatā) ⁽³⁷⁾ という観点から見て住することはない。法性とは不生なるものであり、不生なるものは過去でもなく未来でもなく現在でもない。過去でもなく未来でもなく現在でもないものは、自性なるもの (*prakṛti) ⁽³⁸⁾ である。自性なるものは不生である。ブラフマー神よ、このような、三世の平等性を備えた精進の実践は、授記を速やかに [P93b] 獲得させる。ブラフマー神よ、このような容認〔の知〕 (*kṣānti) を備えた菩薩は、あらゆる法を捨てないという布施を信解 (*adhimukti) ⁽³⁹⁾ する。あらゆる法を防御しないという戒を信解する。あらゆる法について慢心 (*manyānā) しないという忍辱を信解する。あらゆる法を実践しないという精進を信解する。あらゆる法の平等性という禪定を信解する。あらゆる法を分別しないという智慧を信解する。以上のように信解する者は、〔何らかの法を〕増大させることも減少させることもなく、〔善の方向に〕行動することも〔悪の方向に〕変化することもない。〔なぜなら〕^{(41)→} 布施を行っても彼が果報を望むことはないからである。戒を守っても彼が〔それに何かを〕付託⁽⁴⁰⁾ することはないからである。 ^{←(41)} 忍辱を修習しても彼は内も外も空だからである。精進を実践しても彼が〔それを〕成就することはないからである。禪定において平等を保っていても彼が〔そこに〕住することはないからである。智慧を修習していても彼が〔法の〕特徴〔を捉えること〕はないからである。ブラフマー神よ、そのような容認〔の知〕を備えた菩薩は、なす

(34) この部分は蔵訳のみ。

(35) Ch1: 其滅盡者則不復起。Ch2,3: 若法滅不復更起。

(36) Tib: gang ma phyin pa(*anāgata) de ni mi skye ba'i mtshan nyid(*anutpādalakṣaṇa) do. Ch1: 設使獲者無有起相(想)。Ch2: 若未至即無生相。Ch3: 若法未至即無生相。

(37) Ch2, 3: 実相。

(38) Tib: rang bzhin. Ch1: 本淨。Ch2: 從本已來性。Ch3: 自性。BP XXII-2 節で「自性」は次のように説明されている。「かの諸法の自性 (*prakṛti) とは何か、というと、一切の法は空性という自性を有し、対象化を離れている。一切の法は無相という自性を有し、思惟や分別を離れている。一切の法は無願という自性を有し、取り入れることがなく、捨て去ることがなく、志願がなく、能力がなく、完全に本質 (*svabhāva) から離れている。それは、自性として清浄なのである。輪廻の自性は涅槃の自性である。涅槃の自性は一切諸法の自性である。それゆえ、心は自性として清浄であるといわれる」(五島 [2013] 90 頁)。

(39) Tib: mos. Ch2: 了達。Ch3: 信。

(40) Tib: sgro btags pa(*samāropa). Ch1: 等同像 Ch2,3: 貪著。

(41) [引用] 『修習次第・後編』(Bhāvanākrama III)

[Skt]: (yac ca tatraiva brahmaparipṛcchāyām uktam.) dānaṃ ca dadāti tac cāvipākābhikāṅkṣī, śīlaṃ ca tac cāsamāropita ity ādi. (Bhk 24.18-19) .

[Tib]: (yang tshangs pas zhush pa de nyid las gsungs pa.) sbyin pa yang sbyin la de'i rnam par smin pa de la yang mi re la, tshul khriṃs kyang bsrung ba de yang sgro 'dogs pas ma yin (zhes bya ba la sogs pa 'byung ngo. (Peking ed. dBu-ma A 71b6) 一郷 [2011]121 頁参照。

べきことをすべて〔現実化して〕示す⁽⁴²⁾が、なすべきことに汚されることはない。彼は、汚されることがないから [Zh221] あらゆる法の平等性を獲得するが、手に入れるものに〔心が〕奪われることはない。損失にも、名誉にも、不名誉にも、誹謗にも、称讃にも、苦痛にも、安楽にも、〔心が〕奪われることはない。彼は、世間のあらゆる法を超越し、〔対立的な〕二として見る心から離れて不二の法を理解しているので、高慢にもならず、卑屈になることもない。喜ばず⁽⁴³⁾、怒らず、危害を加えず、迫害⁽⁴⁴⁾もせず、思い上がらず、放逸にならず、放縦にもならない。すべての有情が [P94a] 成熟するようと、二つの見解に陥る有情のために大慈を起し、意図して (*samcintya) 輪廻の生存を取るのである。ブラフマー神よ、自我は存在しないという容認〔の知〕を獲得することで、すべての有情に対して大慈を起し人々を受け入れる (*saṃgraha) ことは、精進を実践する極致である」

精進の実践というこの教えが説かれた時、八千の菩薩には無生法忍が生じた。彼らはすべて、世尊によって、「〔汝らは〕いずれも、堅固精進如来という同じ名前で、それぞれ異なる仏国土において、悟りを完全に悟るであろう」と授記されたのである。

(XXXV-1) 菩薩を讃える海の比喻 (散文)

その時、その集會に坐って〔控えて〕いた具寿マハーカーシャパ (大迦葉) が、世尊に次のように申し上げた。「世尊よ、例えば、大龍たちは、[Zh222] 雨を降らせる時大海に降らせるのであって、それ以外の他のところに〔降らせること〕はしません。世尊よ、ちょうどそのように、大龍に等しいこれらの正しい人 (*satpuruṣa 菩薩) たちも、このようなこの法の雨を、大海に等しいこれらの正しい人たちの心の流れ (相續) に降らせるのであって、それ以外の有情たち〔の心の流れ〕に〔降らせること〕はしないのです」

世尊が仰せになる。「迦葉よ、確かに〔汝の〕言う通りではあるが、それらの龍の大王たちに、このジャンブドヴィーパ (閻浮提) には雨を降らせないという物惜しみの心はないのである。なぜなら、ジャンブドヴィーパの大地の方が、車軸⁽⁴⁵⁾〔が降る〕ほどの〔激しい〕雨の流れには耐えられないからである。

カーシャパよ、もし、それらの大龍たちがこのジャンブドヴィーパに雨を降らせた場合、村・町を含み、丘・岩山・山々を含み、溜め池・堀⁽⁴⁶⁾を含んだこのジャンブドヴィーパをちょうど器の水が [P94b] 棗の葉 (*badarapattra) を浮かべるようにして、浮かべて流してしまうであろう。それ故、大龍たちはこのジャンブドヴィーパに雨を降らせることはしないのである。カーシャパよ、ちょうどそのように、これらの正しい人たちに、他の有情には偉大な法の雨を

(42) Tib: ston pa. Ch1: 普現. Ch2,3: 示現.

(43) Tib: sdud(→BKLPHT: sdug) par yang mi byed. Ch2,3: 不喜.

(44) Tib: kun nas gnod pa. *Mvy* 5359: samabhidruta.

(45) Tib: shing rta'i srog shing (*rathākṣa, a chariot-axle). Ch2,3: 車軸. Cf. 『起世因本経』: 彼三摩耶無量久遠不可計時, 起大重雲乃至遍覆梵天世界, 如是覆已注大洪雨. 其雨滂瀾猶如車軸或有如杵. (Taisho vol.1, 410c20-23)

(46) Tib: khor yug dang 'obs. Ch1: 溪谷. Ch2,3 陂池.

降らさないという法の物惜しみはないのであって、これらの人々の方がこのような法〔の雨〕に相応しくないのである。それ故、正しい人たちは、大海の如き知恵 (*mati) を備えた人々の方に法の大雨を降らせるのである。

カーシャパよ、たとえば、車軸ほどの雨の流れが降ったとしても、それによって大海は減ることもなく、満ちることもない。カーシャパよ、ちょうどそのように、正しい人たちが百劫にわたって法を聞いたり説いたりしたとしても、いかなる法も減ったり [Zh223] 増えたりすることはない。(→第2詩)⁽⁴⁷⁾

(48)→たとえば、かの大海に四大洲にある様々な河川から注ぎ込んだ水は、すべて、塩辛いという一つの味になってしまう。カーシャパよ、ちょうどそのように、正しい人たちは、様々な法門において法の教えが説かれるのを聞くと直ちに、空性という一つの味として信解するのである。←⁽⁴⁸⁾ (→第5詩)

たとえば大海は清らかで清潔であり、汚れなく、明浄であり、汚濁がなく、⁽⁴⁹⁾→汚濁した水を〔そのまま〕取り込むことはない←⁽⁴⁹⁾。カーシャパよ、ちょうどそのように、正しい人たちもまた、清らかで清潔であり、汚れなく、明浄であり、⁽⁵⁰⁾→害意 (*vyāpāda)・嫌悪 (*dveṣa)・怒り (*krodha)・敵意 (*upanāha) などのあらゆる頑なな心 (結恨 *khila) ←⁽⁵⁰⁾ を取り込むことはない。(→第3詩)

[カーシャパよ、]⁽⁵¹⁾たとえば、大海が深くて計りがたい (*duravagāha) ように、正しい人たちも甚深の法の導き (*naya) に入っており、その深さはすべての声聞・独覚には計りがたい。(→第4詩)

たとえば、大海はその水が無量にあり、宝石の集まりも無限にあるように、カーシャパよ、正しい人たちもその智慧は [P95a] 無量であり、法という宝石の集まりも無限である。

カーシャパよ、たとえば、大海は様々な宝石をその要素 (*dhātu) としているように、カー

(47) 以下、後に挙げられる詩頌に類似の比喩説明がある場合その詩頌番号を挙げることにする。

(48) Cf. *KP* sec.40: 「たとえば、カーシャパよ、様々な方角 (四方四維) にある大河の大量の水も、大海に入るとすべて一つの味つまり塩辛いという味になる。ちょうどそのように、様々な〔実践の〕門〔に入ることで〕積み重ねられた菩薩の善根も、すべて、悟りへと向かう一つの味つまり解脱という味に振り向けられる」 *tadyathāpi nāma kāśyapa nānādigvidikṣu mahānadiṣv āpskandho mahāsamudre praviṣṭaḥ sarvam ekaraso bhavati yad uta lavaṇarasah evam eva kāśyapa nānāmukhopacitaṃ kuśalamūlaṃ bodhisatvasya [bo]dhāya pariṇāmitaṃ sarvam ekarasaṃ bhavati yad ida[m] vimuktirasam.* なお、空性や解脱に喩えられる場合、原語 *rasa* には妙薬・精髓・真髓などの語義が含意されていることに留意すべきだろう。

(49) Ch2, 3 は「濁水が流入してもすぐにすべて清浄になる」とする。

(50) Tib: *gnod sems dang zhe sdang dang khro ba dang khon*(CDHNT: 'khon) du 'dzin pa'i(DKL: pa) *tha ba*(omitted in DKL) *thams cad*. Ch1: 結恨解厭瞋怒之瑕. Ch2: 諸結恨塵勞之垢. Ch3: 瞋恨害垢. *Mvy* 178: *vyāpādakhiladveṣapratipanna, gnod sems kysis tha ba dang zhe sdang la zhugs pa.* Cf. *LV*: 「忍辱波羅蜜は法の輝く門であり、あらゆる害意・頑なな心・過失 (→ *dveṣa* 嫌悪?)・慢心・傲慢・高慢の放棄、悪意に満ちた有情の成熟へと導く」 *kṣāntipāramitā dharmālokaṃ mukhaṃ sarvavyāpādakhiladoṣamānamadardaprahāṇāya vyāpannacittasattvapariṇānatāyāi saṃvartate.* (25.4-5)

(51) 3 漢訳による。

シャパよ、正しい人たちも⁽⁵²⁾→ 様々な完成 (*abhinirhāra) というかたちで無量の法という宝石をその要素としている ←⁽⁵²⁾。

(→ 第7詩)

カーシャパよ、たとえば大海の中から、⁽⁵³⁾→ 価値のあるもの、価値のないもの、ガラス玉のように〔価値があるようでない〕もの ←⁽⁵³⁾ という三種のものが生じるように、カーシャパよ、正しい人たちも有情の機根に応じて [Zh224] 法を説く時に、声聞の乗り物、独覚の乗り物、最上の偉大な乗り物において、心の相続を解脱させる。(→ 第8詩)

⁽⁵⁴⁾→ カーシャパよ、たとえば、大海が一有情のためにあるわけではないように、カーシャパよ、正しい人たちも一人の有情のために菩提心を起こすわけではない。 ←⁽⁵⁴⁾ (→ 第6, 16詩)

カーシャパよ、たとえば、大海が少しずつ深まっていき、少しずつ下っていき、少しずつ下ってきたように、カーシャパよ、正しい人たち〔の心〕も⁽⁵⁵⁾→ 一切知者性へと深まっていき、一切知者性へと下っていき、一切知者性へと下ってきたのである ←⁽⁵⁵⁾。(→ 第9詩)

カーシャパよ、たとえば、⁽⁵⁶⁾→ 大海が死体とともにあることはないように ←⁽⁵⁶⁾、カーシャ

⁽⁵²⁾ Ch1: 以若干教無量法寶自然充滿。Ch2: 入種種法門集諸法寶，種種行道出生無量法寶之聚。Ch3: 一切皆入種種法門，集諸法寶種種行道，出生無量法寶之聚。

⁽⁵³⁾ Tib: rin po che kha cig rin thang yod pa (P: yang ba) dang kha cig rin thang med pa dang kha cig mching bu(*kāca) lta bu dang rnam pa gsum 'byung ste. Ch1: 有三部寶，眞身之寶，清水之寶，爲財業寶。Ch2: 有三種寶，一者少價，二者有價，三者無價。Ch3: 生三種寶，一者少價，二者大價，三者無價。Ch2, 3は「一者少価・二者有価(大価)・三者無価」とし、それが「声聞・独覚・大乘」の順に対応しているとすれば、最後の「無価」は「簡単には価値を測れない貴重なもの」の意であろう。蔵訳の mching bu の原語と想定される kāca には、ガラスの意と水晶の意があるが、多くの仏典では、kāca(maṇi) を「価値の高い瑠璃の宝石に見えながら実はまったく価値のないまがい物としてのガラス玉」とする用例が少なくない。そこで、本文のように訳したが、三乗の順に対応している訳ではない。なお、P版によれば第一は「価値の大きいもの」ということになる。kāca のガラスの意の用例は以下の通り。KP sec. 85: 「たとえば、カーシャパよ、瑠璃という摩尼宝石はたった一つでも、スメールほどの〔大きさの〕ガラス玉の集積より優っている」 tadyathāpi nāma kāśyapa ekaṃ vaiḍūryaṃ maṇiratnaṃ sumerumātraṃ rāśi kācamaṇikān' abhībhavati. KP sec. 91: 「たとえば、カーシャパよ、神々を含む世間の人たちがガラスの摩尼(ガラス玉)を磨いたとしても、そのガラスの摩尼は決して瑠璃の摩尼宝石にはならないであろう」 tadyathāpi nāma kāśyapa sadevako loko kācamaṇikasya parikarma kuryāt, na jātu sa kācamaṇiko vaiḍūryamaṇiratno bhaviṣyati. VKN 3.22: 「瑠璃の宝石とガラスの宝石を一緒のものとは見なしてはいけません」 mā vaiḍūryaratnaṃ kācamaṇikaiḥ samānikārṣiḥ. Divy: 「この宝の島には〔瑠璃の〕宝石に似たガラスの摩尼があります。吟味に吟味を重ねて選ばなければなりません。あなた方がジャンブドヴィーパに戻ったときに後悔することがあつてはなりません。」 santy asmin ratnadvīpe kācamaṇayo ratnasadrṣāḥ, te bhavadbhir upaparīkṣyopaparīkṣya grhītavyāḥ. mā vaḥ paścāj jambudvīpagatānāṃ tāpyaṃ bhaviṣyati. (142.27-29) このほか、一切知者性を目指す菩薩と解脱のみを目指す声聞・独覚との違いを、大海から得られる高価な摩尼宝石(anardhveyamaṇiratna)と都城にある多数のガラスの摩尼(kācamaṇi)とに喩えた例がある(Gv 400.16-20)。

このように、他の仏典を見る限り mching bu(*kāca) はガラス玉の意と取るべきだろうが、最後の例で見たように、ガラス玉は都市にある人工のものであって大海に産する宝石ではない。経典の作者は kāca(maṇi) を瑠璃(vaiḍūrya) のような、海に由来する摩尼宝石と考えていたのかも知れない。

⁽⁵⁴⁾ Ch1, 2 はこの部分を欠く。

⁽⁵⁵⁾ Tib: skyes bu dam pa de dag kyang thams cad mkhyen pa nyid du gzhol, thams cad mkhyen pa nyid du 'bab, thams cad mkhyen pa nyid du bab pa'o. Ch1: 志諸通慧，行諸通慧，漸得成就於大聖道。Ch2: 向薩婆若漸漸轉深。Ch3: 向薩婆若漸漸轉深漸漸隨意。

⁽⁵⁶⁾ Cf. 『中阿含經』：我大海清淨不受死屍。若有命終者過夜風便吹著岸上。(Taisho vol.1 476b6-7)

パよ、正しい人たちも声聞・独覚の心とともにあることはない。慳貪、破戒の心、害意、怠慢の心、失念、愚鈍な心〔などの煩惱〕とともにあることはない。自我 (*ātman)・魂 (*sattva)・生命 (*jīva)・個体 (*pudgala)、精神 (puruṣa) などの〔靈魂・主体に相当するものを主張する〕見解とともにあることはない。(→ 第 10 詩)

カーシャパよ、たとえば、劫〔火〕に焼かれるとき、河・小川・泉・沼・池などすべての水源は、[P95b] 真っ先に干上がり、その後、大海が尽きて干上がってしまう。カーシャパよ、ちょうどそのように、正法が消滅するとき、局限された (*prādeśika) 行を行っている有情たちの正法がすべて真っ先に消滅し、その後、大海の如き知恵 (*mati) をもち仏乗を護持する正しい人たちの [Zh225] 手から正法が消滅するであろう。しかし、カーシャパよ、彼ら正しい人たちは生命を投げ捨ててでも正法を手放すことはないのであるから、⁽⁵⁷⁾カーシャパよ、そのような正しい人たちの手から正法が消滅することがあるだろうか。彼らの正法が消滅するなど汝は考えてはいけない。(→ 第 13, 14 詩)

カーシャパよ、たとえば、⁽⁶²⁾→ 大海には「あらゆる摩尼宝石の集積」という名の⁽⁵⁸⁾→ 金剛(ダイヤモンド)からなる偉大な摩尼宝石 ←⁽⁵⁸⁾がある。⁽⁵⁹⁾→ 七つの太陽が昇って ←⁽⁵⁹⁾ (60)→ ブラフマー神の世界まで光が生じたとしても、その宝石が焼けることはなく、あらん限りの世界の中の他の仏国土で大海のあるところにその摩尼宝石は移動するであろう ←⁽⁶⁰⁾。カーシャパよ、⁽⁶¹⁾→ その摩尼宝石が、別の大海に移動することなくこの世界において焼けてしまうなどということ ←⁽⁶¹⁾ は道理のないことであり、あり得ないことである。←⁽⁶²⁾ カーシャパよ、ちょうどそのように、かの〔摩尼宝石の〕如き正しい人たちもまた、正法が減してしまい、世

(57) Ch3 のみここに次の様な内容の一文を加える：「カーシャパよ、大海の水が減尽することはあっても菩薩・摩訶薩の甚深の正法は滅尽することはない」。

(58) Tib: rdo rje tshogs kyi nor bu rin po che(omitted in P) chen po(omitted in B) zhis. Ch1: 有如意珠、名曰金剛。Ch2, 3: 金剛珠。Ch3 はすぐ後に「於千世界大海之中轉作金剛摩尼寶珠」という説明を加える。

(59) Tib: nyi ma bdun shar nas. Ch1: 踊出七日。Ch2: 至七日出時。Ch3: 乃至第七日出之時。Ch3 では「七番目の太陽が出る時」の意になる。

(60) Ch1 はここを「上は梵天〔界〕に至るまで悉く焼け、諸世界・三千大千仏土が余すところなく焼けてしまつてから、〔その摩尼宝石は〕他方に至る」とする。

(61) Tib: gang nor bu rin po [che de rgya mtsho chen po(omitted in CNP) (CDHNP insert : las)] gzhan du ma 'phos par(CDHNP: pa dang) 'jig rten gyi khams 'dir tshig par (CDHN insert : mi)'gyur ba. [] 部分は B 本では欠如。Ch1: 其如意珠(就)異世界當見燒壞。Ch2, 3: 若是寶珠在此世界世界燒者。訳文は写本系の読みに従った。版本系によれば「その摩尼宝石が、(大)海から別のところに移動しないことと、この世界において焼けないということ」となる。また、Ch2, 3 にしたがえば「この摩尼宝石がこの世界にあって世界が焼けてしまうならば」ということになるが、Ch2 の下線部の「世界」は聖語藏經では欠けており、それに従って「この摩尼宝石がこの世界にあって焼けてしまうならば」と解すべきであろう。

(62) Cf. *Gv*: 「良家の子よ、たとえば、大海には、『あらゆる摩尼宝石の集積』という名の偉大な摩尼宝石の王があり、その宝石が他の世界にまだ移動していないのに、あらゆる劫を焼く火(劫火)が大海を I ターラ樹ほどの深さをも干上がらせることができるなどということは道理のないことであり、あり得ないことである」 tadyathā kulaputra asti sarvamaṇiratnasamuccayaṃ nāma mahāmaṇiratnarājam mahāsamudre, tasya anyalokadhātvasaṃkrāntasya asthānam anavakāśo yan mahāsamudrasya sarvakalpoddāhāgninā śakyaṃ tālamātram api pariśoṣayitum. (399.10-12)

間に止まるものとして七つの邪法 (*asaddharma)⁽⁶³⁾が生じる時、他の仏国土へと移動するであろう。七つとは何かと言えば、(1) 外道の立場、(2) 悪友に引き込まれること、(3) 間違った修行、(4) 互いに危害を加えること、(5) 間違った見解という深淵 (*dṛṣṭigahana)、(6) 善根の破壊、(7) [真理の] 獲得も現観もないことである。これらの七つの邪法が [P96a] 世間に止まるものとして生じている場合、かの正しい人たちは、有情たちが [正法による教化には] 相応しくないことを知って、他の仏国土へと [Zh226] 移動するであろうが、[彼らが] 仏陀を見ること、正法を聞くこと、有情が成熟すること、善根が輝く (増長する)⁽⁶⁴⁾ことから離れることはないであろう。(→ 第 11, 12 詩)

カーシャパよ、たとえば、大海に依拠して無数の生き物 (有情) たちが生きてるように、カーシャパよ、菩薩に依拠して無数の人々 (有情) が三つの完成 (*sampad)⁽⁶⁵⁾に依拠している。三つとは何かと言えば、神々としての完成、人間としての完成、涅槃という完成である。

⁽⁶⁶⁾→ カーシャパよ、たとえば、大海は [海以外に住んでいる] 別の生き物 (有情) には [塩辛くて] 飲むことができないように、カーシャパよ、かの正しい人たちが説く法も、他の教えを奉じる人たちには飲むことはできない。←⁽⁶⁶⁾

⁽⁶⁷⁾→ カーシャパよ、たとえば、大海の中にいる生き物 (有情) たちは他の水は求めず、それ (海の水) のみを飲むように、カーシャパよ、彼ら正しい人たちも、他の見解による法の味を飲むことはなく、自ら存する者 (*svayambhū 仏陀) の知である法の味 [のみ] を飲むのである ←⁽⁶⁷⁾

その時、マハーカーシャパが世尊に向かって次のように申し上げた。「世尊よ、⁽⁶⁸⁾→ 三千大千世界にある ←⁽⁶⁸⁾ [Zh227] 大海の深さや大きさを測ることはできても、声聞、独覚、神々を含めた世間の人々が正しい人たちの [心の] 深さや大きさを測ることはできません。⁽⁶⁹⁾→ その点で、かの正しい人たちはその心が虚空に等しいとされているのです ←⁽⁶⁹⁾」

世尊が仰せになられる。「カーシャパよ、⁽⁷⁰⁾→ ガンジス河の砂にも等しい数の三千大千 [P96b] 世界にある大海の深さや大きさを ←⁽⁷⁰⁾ 測ることはできても、声聞、独覚、神々を含めた世間の人々が大海の如き優れた知恵を持つ正しい人たちの深さや大きさを測ることはできない」(→ 第 17 詩)

(XXXV-2) 菩薩を讃える海の比喻 (詩頌)

さて、そのとき、世尊はこれらの詩頌を仰せになられた。

(63) 本経に見られる「七邪法」については陳 [2001] 参照。

(64) Tib: dge ba'i rtsa ba yongs su 'bar ba (KLPhT: 'bab pa). Ch1: 殖衆徳本. Ch2, 3: 増長善根。

(65) Tib: phun sum tshogs pa gsum. Ch1: 三趣. Ch2, 3: 三樂。

(66) Ch1: 譬如、迦葉、大海之中龍阿須倫而得自在。此諸正士亦復如是普悉降伏一切魔衆。

(67) Ch1, 2 はこの部分を欠く。

(68) 3 漢訳はこの部分を欠く。

(69) Ch1, 2 はこの部分を欠く。

(70) Ch1: 三千大千世界之中所有諸塵。Ch2: 三千大千世界微塵。Ch3: 恒河沙等諸世界中大海之水。

- 1 たとえば、大量の水の蔵〔たる大海〕が飽きることなくありとあらゆる河川の水を求めように、彼ら（正しい人たち）はここにおいて法を求めるが、いつまでも法に飽きることはない。
- 2 たとえば、あらん限りの大量の水を受け入れても、その場合、大海は減ることも満ちることもないように、正法を聞いても法界⁽⁷¹⁾が増大することも減少することも見ることはない。
- 3 たとえば、汚れのない海が水をいくら取り込んでも汚濁のある河川がそこに注ぎ込む〔ことで汚される〕ことはないように、⁽⁷²⁾→ 有能で賢明な彼らは、〔どんな〕行動を取ったとしても ←⁽⁷²⁾ 清浄〔なまま〕であり、煩惱を取り込むことはない。
- 4 たとえば、⁽⁷³⁾→ その全体を保持している大海は ←⁽⁷³⁾ 深淵で広大なために測ることができないように、⁽⁷⁴⁾→ 海〔にも喩えられる彼らの〕功德や智慧も ←⁽⁷⁴⁾ 他の教えを奉じる人たちには測ることはできない。
- 5 たとえば、大海に注ぎ込む河川が種々様々であっても一味になるように、⁽⁷⁵⁾→ 種々様々な法を聞いても、それらは解脱という点では一味である ←⁽⁷⁵⁾。
- 6 たとえば、水を湛えた大海が一つの生き物のためにあるわけではないように、悟り（菩提）へと行動する彼らは、〔地獄から天界までの〕あらゆる境涯にあるものを助けるために行動するのである。
- 7 たとえば、大海が宝石をその要素（*dhātu）としており、宝石はそこにあって生じるように、優れた人（有情）たちも宝石が生じる所であり、彼らから三つの宝石（三宝）がここに生じる。
- 8 たとえば、分別のない海に [Zh228] 常に三種の宝が生じるように、かれら（正しい人たちは）諸々の法を説くけれども、⁽⁷⁶⁾→ 三つの乗り物によって人々（有情）は清浄になる ←⁽⁷⁶⁾。
- 9 たとえば、大海が河や岸から〔離れるにしたがって〕 [P97a] 少しずつ深まってゆくように、優れた人々は、有情を解脱させるために絶えず努力して、⁽⁷⁷⁾→ [少しずつ] 一切知へと深まってゆく ←⁽⁷⁷⁾。
- 10 たとえば、海が死体とともにあることはなく、それら（死体）と混じることのないこと

(71) Tib: chos kyi dbyings(*dharmadhātu). Ch1: 智慧. Ch2, 3: 此諸菩薩.

(72) Tib: thub mkhas spyad pa spyod pa yang de dag. Ch1: 遵修行者. Ch2, 3: 此諸菩薩.

(73) Tib: rgya mtsho chen po lus 'chang bas(BKLPH: chung ba, P: chud pas). 写本系によれば「大海は身体の小さなものには（…… 測ることができない）」と読める。この方が、後半の「他の教えを奉じる人たち」との対比ができていいのかも知れない。

(74) Tib: yon tan rgya mtsho(BKLPT: mtsho'i) ye śes kyang. Ch1: 智慧徳海. Ch2, 3: 功德智慧. BKLPT に従えば「功德の海たる〔彼らの〕智慧も」ということになろう。

(75) Ch1: 若干種人 僉來聽法 悉歸一乘 同誼之典. Ch2: 所聽受法同一相. Ch3: 所聽受法一空味.

(76) Ch1: 則以三乘 開導衆生. Ch2, 3: 三乘度人無彼此.

(77) Ch2: 迴向甚深薩婆若.

がその特質 (*dharma) であるように、優れた悟りへと向かう〔彼ら〕が劣った乗り物とともにあることはない。

- 11 たたとえば、海から生じたある宝石は、「宝石の集積」という名でよく知られているが、〔すべてを〕焼く劫が発生しても焼かれることがなく、世界が破壊されるとき、別〔の仏国土〕に行く。
- 12 ちょうどそのように、汚れなき法が破壊されるとき、優れた精進力を備えた彼らは、〔それを〕懸命に護持する。巧みな〔彼ら〕は、〔教化に〕相応しくない世間の人たちが邪法を欲していることを知って、他の勝者（仏陀）のもとに行く。
- 13 ある時〔すべてを〕焼く劫が発生して、泉、湖、池が干上がるだろう。(78)→ この海は、その後干上がるだろう ←(78)。この三千大千〔世界〕もまた破壊されるだろう。
- 14 局限された行に依拠している人の、優れていると見なされている法が、ここにおいて〔先に〕滅びる(79)。その時、ここにおいて優れた人は、身体や生命をも捨ててこの〔正〕法を守るのである。
- 15 (80)→ スガタ（善逝）が入滅されてからも常に守られてきているので ←(80)、清浄な彼らにおいて、この法が破壊されることはない。そのように、その意向が清浄な彼らは、常に法に住しつつ行を實踐する。
- 16 ちょうど、無量の有情（生き物）が依拠している海が一有情のためにあるのではないように、偉大な名声を持つこれらの人たちは、すべての世間の人々を解脱させるために行動する。
- 17 (81)→ この世界の海がどれだけのものか ←(81)、[Zh229] 余すことなくその量を知ることとはできても、彼ら勝者（正しい人）たちのすべての行動を、阿羅漢や独覚たちが知ることはできない。
- 17' (82)→ 余すところなき方角（十方）の虚空〔など〕の諸要素や優れた人（声聞・独覚）たちの〔知の〕量を測ることができたとしても、虚空を凌駕している彼ら（正しい人たち）の知の量は決して測ることはできない。 ←(82)
- 18 菩薩は [P97b] 精進と誓戒が堅固であって、世間の人々を余すことなく解脱させるために、(83)→ 広大な心を奮い立たせる ←(83)。カーシャパよ、彼らに等しい者はなく、まして、優れている者などいるはずもない。

(78) Tib: rgya mtsho 'di(BCDHNPPH: dir) ni phyi(CDLP: phyis, B: phyir) nas skam par 'gyur. Ch1: 然後海水 乃爲消涸. Ch2, 3: 爾時水王於後竭.

(79) BKLT: nub pa. CDHNPPH: nus pa. Ch2,3: 行小道者亦如是 法欲盡時在前滅.

(80) Tib: bde gshegs 'das na'ang rtag par bag byed(CDHNPPH: med) pas. Ch1: 正覺現在 若滅度後. Ch2: 若佛在世滅度後. Ch3: 若佛在世若滅後. TSD bag byed : rakṣati, rakṣāmi.

(81) Tib: 'jig rten khams 'di rgya mtsho ji snyed pa. Ch1: 於佛世界 諸有大海. Ch2, 3: 十方世界諸大海.

(82) この部分は蔵訳のみ.

(83) Tib: rgya che yangs pa'i sems rab gzhol byas pa. Ch1: 心如是者 宜爲稽首. Ch2: 勇猛精進迴向心. Ch3: 勇猛精進堅固心.

- 19 彼らは、宝石が生じる海の如く福德なるもの〔が生じる〕福田である。(84)→ 彼らは綿密なる考察の王 (*vicārarāja) であり、すぐれた医師 (*bhaisajyavara) であり ←(84), 長期に病む人々 (有情) を救済する。
- 20 彼らは〔世間の人々の〕帰依所、守護者、究極の拠り所 (*parāyaṇa) である。また、救済者、灯火を輝かす者であり、目の見えない人たちの目を生じる者である。それ (目) を得て、彼ら (世間の人々) は甘露 (涅槃) を獲得する。
- 21 彼らはそれぞれが法の最勝王 (*jinottama) として輝いている。彼らは (85)→〔欲界にあつて〕多くのことを考える ←(85) シャクラ (帝釈) であり、〔色界の〕四禪に住するブラフマー神 (梵天) である。彼らが清浄なる教えの輪 (梵法輪 *brāhmadharmacakra) を転じるのである。
- 22 彼らは巧みな隊商の長・導師であり、間違つた道にある者に〔正しい〕道を示す者である。彼らはそれぞれが悪魔を打ち破る勇者である。(86)→ 正しい人は悟りの座 (bodhimaṇḍa) に坐している。←(86)
- 23 彼らの無量の白法は月の如く、彼らの高く輝く光輝は太陽の如くである。(87)→ その知恵は無量であり雲の如くに轟いて ←(87), 三界に甘露の雨を降らす。
- 24 彼らはライオンの如く怖れるという弱点がなく、その心は象の如くよく調御されている。彼らは (88)→ スメール山の如く平等 (不動) であり、←(88) 他の教えを奉じる者に論駁されることがない。
- 25 彼らは水の如く清澄であり、[Zh230] 火の如く常に近寄り難い。彼らは風の如く常に障ぎられることがなく、(89)→ 地の如く動揺を放棄している ←(89)。
- 26 彼らは驕慢・慢心・瞋恚・嫉妬がなく、葉樹の如く分別することがない。彼らは蓮華の如く世間八法に汚されることなく清浄な戒を持している。
- 27 彼らはウドンバラの華の如く、幾千万ものカルパの間、(90)→ その声を聞くことは難しい ←(90)。彼らは二足尊 (仏陀) に対する恩を知る者である。彼らは仏陀の系譜 (種

(84) Tib: de dag dpyad pa'i rgyal po sman pa'i mchog. Ch1: 此爲良工(土)上妙醫王。Ch2,3: 是爲最上大醫王。

(85) Tib: don mang sems pa ste. Ch1: 多思利誼(誼利)。Ch2, 3: 決斷智。

(86) Tib: sems can dam pa byang chub snying por gnas. Ch1: 鑷除諸塵爲清淨土。Ch2: 是爲清淨除惱穢。Ch3(勇猛能住大菩提) 是爲清淨除穢惱。3 漢訳はいずれも「(彼らは) 煩惱の汚れを除いた清浄な人である」という趣旨 (ただし、Ch3 は詩頌の第3句の「降魔」の代わりにこの蔵訳対応部分を置いている)。

(87) Tib: sprin lta bur(KLT: bu) yang tshad med blo sgrogs(BPh: gros, T: grogs) shing. Ch1: 智慧超卓 如須彌山。Ch2: 智慧超出如須彌。Ch3: 菩薩智慧生增長。

(88) Ch1: 若如大地載諸山陵。Ch2: 是則譬如金剛山。Ch3: 菩薩堅固如須彌。

(89) Tib: sa dang 'dra bar tha ba(*khila) rab tu spangs. Ch1: 以離解廢 又若如地。Ch2: 是則如地無能動。Ch3: 無能動轉爲如地。「動揺」と訳した tha ba(*khila) は瞋恚などの煩惱 (不安定な感情) を暗示している。

(90) Tib: sgra thos dka'. この場合「彼ら (正しい人, 菩薩) の説法を聞くことが難しい」という意味であろうが、「正しい人 (satpuruṣa), 菩薩 (bodhisattva)」という言葉を書くことすら難しい、ということを含意しているかも知れない。Cf. Jā: 「<ブッダ>という声だけでも世の中では聞くことが難しい、まして仏陀の出現 (に会うことが難しいこと) は言うまでもない」 buddho 'ti kho ghosamattam pi loke dullabham,

- 姓)に住すべく努力する。
- 28 彼らは悲心が大きく、その誓戒は堅固である。慈心に住し、喜心に [P98a] 秀でている (*abhyudgata)。五欲の対象に対して無関心 (捨*upekṣā) であり、常に勝者 (仏陀) たちの宝を求めている。
- 29 彼らはそれぞれが布施という点で優れており、⁽⁹¹⁾→ その知は戒にしっかりと根ざしている ←⁽⁹¹⁾。⁽⁹²⁾→ 彼らは忍耐の力によってひたすら勇敢である ←⁽⁹²⁾。その精進は優れており、常に威厳を保っている。
- 30 彼らは禅定と神通とに巧みである。彼らは化身となって無量の〔仏〕国土に趣く。正しく優れた牟尼 (仏陀) のもとで法を聴聞し、聞いたとおりに〔人々に〕教示する。
- 31 彼らは人々の行動を知り、その信解に応じて解脱させる。〔人々の〕信解の状態を巧みに理解し、⁽⁹³⁾→ 修行を堅実なものにして外道を〔も仏弟子として〕獲得する ←⁽⁹³⁾。
- 32 彼らのそれぞれは、「すべての法 (存在) は、これら〔諸縁〕の集まりから生じる」とよく理解する。彼らは縁に通暁しており、二辺〔という極端な〕見解を捨て⁽⁹⁴⁾、平等を楽しむ。
- 33 彼らは法に関して「この法はどこから来てどこに行くのか」と如実に観察する。「すべての法は来ることもなく、生じることもない。⁽⁹⁵⁾→ 確定している法性は平等である ←⁽⁹⁵⁾」と理解する。
- 34 作られたもの (有為)〔であるこの世の存在〕を [Zh231] 虚妄と見れば見るほど、悲心をもつ者となる。人というものは真実ならざる煩惱に苦しむが、彼ら (正しい人たちは) 〔そういう人を〕解脱させるために行を実践する。
- 35 愚者は私 (我) と私のもの (我所)〔が実在すると〕構想 (分別) して、間違ったこと (*viṣama) を懸命に行う。⁽⁹⁶⁾→ 〔自らが奉じる〕その法が真実でないことを知り

pageva buddhuppādo. (vol.1 13.8-9) *Mv*: 「世間において関心の的であった、〔しかし実際には〕今まで聞いたこともなかった<ブツダ>という声を聞いて……」 buddho ti sruṇitva ghoṣaṃ loke kutūhalaṃ aśrutapūrvam. (Vol.1 306.17) ここは ghoṣa のニュアンスを考慮すれば、「ブツダ」という人々の (歓喜の) 叫び声を聞く、という意味であろう。

⁽⁹¹⁾ Tib: ye shes tshul khriṃs la yang rab tu gnas. Ch1: 所奉禁戒 則無等倫。Ch2: 是持淨戒無等侶。Ch3: 善住持戒無等侶。

⁽⁹²⁾ Tib: de dag bzod pa'i stobs kyis gcig tu dpa' . Ch1: 以忍辱力 乘意勇猛。Ch2: 是忍辱健無儔(疇) 匹。Ch3: 善住忍力(辱) 健無匹。

⁽⁹³⁾ Tib: nan tan snying por byed cing mu stegs(*tīrthika) thob. Ch1: 則爲外道 顯示證(證) 明。Ch2, 3: 是然慧燈得濟處。Ch2, 3によれば「〔彼らは〕智慧の灯火を燃やし、〔悟りへの〕渡し場 (*tīrtha) を得る」となる。

⁽⁹⁴⁾ Ch1: 離吾我見。Ch2: 離於我見。

⁽⁹⁵⁾ Cf. *BP* V-4: 「ブラフマー神よ、しかしながら、諦 (*satya) と言われるものは、実でない (*asatya) のではない。如来がたが出現なされようとなされまいと、法性 (*dharmatā)・法界 (*dharmadhātu) は確立している。それと同じように、輪廻と涅槃とはいずれも常に途切れることなく聖諦である」(五島 [2010]100 頁)

- ←(96), (97)→ [その間違った] 見解を捨てるべく [正しい] 法を実践する ←(97).
- 36 無我を我と、不浄を浄 (*śubha) と、苦を楽と、無常を常住と、転倒して考える凡夫たちには、(98) → 輪廻の始源 (前際 *pūrvānta) が存在することはない ←(98).
- 37 (99) → 彼ら (菩薩たち) はそれが転倒した適用 (*prayoga) だと理解して ←(99), 「ここには魂 (*sattva) もなく、個体 (*pudgala) もない. どこにも我・浄・常・楽は存在しない」として、正しい行 (*samyakprayoga) を修習する.
- 38 カーシャパよ、かの菩薩の [P98b] 行動とその範囲がどういうものか、その功德について [私が] 語ったことは、たとえば地の極微 (*paramāṇu) のほんの一部の分量に過ぎない. 彼らは無限の知恵を持つと称讃されている.
- 39 三千世界にある供養はどのようなものであれ、すべてかの菩薩に供養する. それより優れているものは、[それこそ菩薩への] 供養に相応しい. 勝者の実子 (菩薩 *jinaurasaputra) たちは退転することがないのである.
- 40 仏陀になろうと努力する者たちは、私と未来 [の仏陀] と既に涅槃に入られた勝者 (仏陀) と、余すことなき方角 (十方) におられる [仏陀] とに敬意を表したことになるであらう.

(XXXVI-1) マンジュシュリーと「不聞の聞」の法門

その時、ブラフマー神であるヴィシェーシャチンティンがマンジュシュリー法王子に [次のように] 言う. 「マンジュシュリーよ、どうか、この法門が如来のご加護 (加持力 *adhiṣṭhāna) によって、後の時代、後の時節、最後の五百年において流布し普及するよう、如来・応供・正等覚にお願いすることが出来ますように」

そう言われてマンジュシュリー [Zh232] 法王子はブラフマー神であるヴィシェーシャチンティンにこう言う. 「ブラフマー神よ、これをどう思いますか. この法門において、どんな法が如来によって加護され、どんな法が如来によって教示されるのでしょうか」

[ヴィシェーシャチンティンが] 言う. 「マンジュシュリーよ、そのようなことはありません」
マンジュシュリーが言う. 「ブラフマー神よ、それ故、ここには語ることなどないのであるから、すべての法は加護されることなく、消滅することも防護されることもありません. ブラフマー神よ、何らかの法を加護してほしいと願う人は虚空を加護 [してほしいと] 願っているのです. ブラフマー神よ、どのようなものであれ法を [真実として] 受け入れる⁽¹⁰⁰⁾ 菩薩

(96) Ch1: 斯等曉練 虚偽之法. Ch2, 3: 是能曉了法實相.

(97) Ch1: 而則講說 鑷除諸見. Ch2, 3: 爲斷諸見講說法.

(98) Ch1: 而不分別 生死之際. Ch2, 3: 生死前際不可知. 藏訳の「存在することはない (yod ma yin, *na vidyate) は「知られない (na vidyate)」と解するべきであらう.

(99) Tib: de dag log pa'i sbyor ba de shes nas. Ch1: 若能整(政) 理 攝顛倒原. Ch2: 是能知此從顛倒. Ch3: 能知如是顛倒法.

(100) Tib: khas len(*abhyupagama). Ch1: 歸趣斯典. Ch2: 欲有所受法. Ch3: 若有菩薩作如是言, 我護法者.

は、法を語る人（法師 *dharmabhāṇaka）ではないのです。なぜなら、⁽¹⁰¹⁾→ 菩薩はあらゆる言説から引き下がっており ←⁽¹⁰¹⁾、⁽¹⁰²⁾→ 論争しないこと（*avivāda）を第一としているからです ←⁽¹⁰²⁾。ブラフマー神よ、もし菩薩たちが『この集会において⁽¹⁰³⁾→ この法を説く ←⁽¹⁰³⁾』とこのように考えるなら、彼らにその法を聞く者はいません。なぜなら、聞くことがないこと、それが [P99a] 法を聞くことだからです」

〔ヴィシェーシャチンティンが〕言う。「マンジュシュリーよ、聞くことがないことが法を聞くこととは、どのように考えてそう言うのですか」

〔マンジュシュリーが〕言う。「ブラフマー神よ、眼・耳・鼻・舌・身・意によって聞くことがなければ、それが法を聞くことです。認識対象つまり色・声・香・味・触・法に向かって流れ出す⁽¹⁰⁴⁾ことがないこと、それが法を聞くことです」

その時、その集会には、三万二千人の天子、五千人⁽¹⁰⁵⁾の比丘、三百人の比丘尼、八百人の男女の信者（優婆塞・優婆夷）がいたが、彼らはすべて、マンジュシュリーのこの教えを [Zh233] 聞いて、無生法忍を得て、⁽¹⁰⁶⁾→ 次のように言った。「マンジュシュリーよ、その通りです。おっしゃた通りです。聞くことがないことが法を聞くことなのです」と。 ←⁽¹⁰⁶⁾

(XXXVI-2) ヴィシェーシャチンティンと「不聞の聞」の法門

その時、ブラフマー神たるヴィシェーシャチンティン（V）は、〔無生法〕忍を得たこれらの菩薩たちに次のように言う。「あなたたちはこの法門を聞きましたか」

〔菩薩たちが〕言う。「⁽¹⁰⁷⁾→ ブラフマー神よ、私たちは聞くことがないというあり方で聞きました ←⁽¹⁰⁷⁾」

〔Vが〕言う。「あなたたちはこの法門をどのように理解したのですか」

〔菩薩たちが〕言う。「理解することも認識することもないと、そのように〔理解しました〕」

〔Vが〕言う。「あなたたちはどのような法を獲得したことによって〔無生法〕忍を獲得したのでしょうか」

〔菩薩たちが〕言う。「あらゆる法は獲得することがないからこそ〔獲得したとされるの〕

Cf. AD abhyupagama: approach, arrival; granting, admitting, accepting to be true.

(101) Tib: smra ba thams cad las phyir ldog(CNP: log, Ph: zlog) pa. Ch1: 普入一切経路. Ch2: 出過一切言論. Ch3: 出過一切諸言語. Mvy 5097: pratikramati, phyir ldog.

(102) Tib: rtsod pa med pa lhur byed pa (BCDHN insert: ma) yin no. Ch1: 而無諍訟. Ch2, 3: 是名菩薩樂無諍訟.

(103) Tib: chos 'di (omitted in BCDHNP) ston(BCDHLNPT: bstan) to. Ch1: 説經法者. Ch2, 3: 今說是法.

(104) KLPhT: 'dzag pa(*prasravati). B: 'dzeg pa. CDHNP: 'dzin pa. Ch1: 所流聞. Ch2, 3: 漏. 版本系では「(色などの認識対象を)把握する」という意味になる.

(105) Ch1, 2, 3: 五百比丘.

(106) Ch1: 各各擧聲而歌頌曰: 如是普首 誠如所云 無所聞者 乃爲聽經.

(107) Tib: tshangs pa, thos pa med pa'i tshul gyis thos so. Ch1: 已聞, 梵天, 無所聞故. Ch2, 3: 如我等聽, 以不聽爲聽.

です」

〔Vが〕言う。「この法門はどのように理解すべきですか」

〔菩薩たちが〕言う。「理解することがないというあり方によって〔理解すべき〕です」

〔Vが〕言う。「この法の教示をあなたは直証したのではないですか」

〔菩薩たちが〕言う。「ブラフマー神よ、⁽¹⁰⁸⁾→ あらゆる法は自も他もないが故に、直証するのです ←⁽¹⁰⁸⁾」

(XXXVI-3) ヴィマラケートゥ天子と「不聞の聞」の法門

その時、まさにその集会に来ていた、ヴィマラケートゥ（無垢を旗印とする者*Vimalaketu）⁽¹⁰⁹⁾という名の天子がブラフマー神たるヴィシェーシャチンティンにこう言う。「ブラフマー神よ、この法門をほんのわずかでも聞くならば、たとえ如来から授記されて [P99b] いない人たちでも、私たちが、無上正等覚へと授記します。なぜなら、ブラフマー神よ、⁽¹¹⁰⁾→ この法門は種と芽〔の関係〕を破ることはないからです ←⁽¹¹⁰⁾。〔この法門は〕⁽¹¹¹⁾→ 正しく修行を積んだ (*samyakpratipanna) すべての賢聖たちに護持されています。←⁽¹¹¹⁾ あらゆる善根を生じさせます。悪魔と怨敵を打ち砕きます。あらゆる障碍⁽¹¹²⁾ から [Zh234] 離脱しています。清浄を生じさせ、信ある者を喜ばせ、⁽¹¹³⁾→ 満足させます ←⁽¹¹³⁾。すべての仏陀から守護されています。この法門は神々を含む世間によってよく守られています。この法門は一つの目標に決定して (*ekaniyata) おり、退転することがありません。この法門は欺くことなく〔確実に〕悟りの座へと導きます。この法門は仏陀の諸々の教え（仏法）の真実が生起する場所です。この法門は法輪を転じます。この法門は後悔の念⁽¹¹⁴⁾ を取り除きます。この法門は聖道を浄化⁽¹¹⁵⁾ します。この法門は解脱を望む人たちがよく聞くものです。この法門は陀羅尼を欲する人たちがよく保持するものです。この法門は福德を欲する人たちがよく教示されるものです。この法門は法を欲する人たちがよく護持するものです。この法門は涅槃に至るが故に無量⁽¹¹⁶⁾ です。この法門は⁽¹¹⁷⁾→ 異教の議論に依拠している人によって打ち砕かれることはありません ←⁽¹¹⁷⁾。この法門は布施に相應しい人に沿うものです。この法門は〔教えに〕巧

(108) Ch1: 於一切法現在己身衆生志性皆爲本淨。 Ch2, 3: 一切諸法皆明了通達, 無彼我故。

(109) Tib: dri ma med pa'i(omitted in H) tog(B: rtogs, KLPhT: rtog). Ch1: 離垢英。 Ch2: 淨相。 Ch3: 無垢。

(110) Tib: chos kyi rnam grangs 'di ni 'bras bu dang sa bon chud mi gzon(K: bzon, P: zon, Ph: gson) pa'o. Ch1: 其法典者則爲亡失報應之果。 Ch2: 此經不破因果。 Ch3: 以此法門不失因果。

(111) 3 漢訳はこの部分を欠く。

(112) Tib: bar du gcod pa. Ch1: 貪欲之諍。 Ch2, 3: 諸憎愛。

(113) Tib: mgu bar byed pa'o(omitted in B). Ch1: 而諦執持。 Ch2, 3: 除諸瞋恨。

(114) Tib: 'gyod pa(*kaukrtya). Ch1: 諸狐疑。 Ch2, 3: 疑悔。

(115) Tib: rnam par sbyong ba(BP: spyod pa). Ch1: 至。 Ch2, 3: 開。

(116) Tib: grangs med pa(*asamkhyeya). Ch1: 加施安隱。 Ch2, 3: 能與快樂。

(117) Tib: pha rol (DH insert: gyi) rgol ba dmigs(C: dmig) pa can gyis mi 'phrogs(B: 'phrog, P: phrogs) pa. Ch1: 不斷經典, 壞魔異學故。 Ch2, 3: 若魔外道有所得人不能斷。

みな人たちを喜ばせます。この法門は邪見から離れることで智慧を生じさせます。この法門は愚癡を打ち破ることで知を生じさせます。この法門は [P100a] ⁽¹¹⁸⁾→ 音節からなることばが確定している点で究極的なことばなのです ←⁽¹¹⁸⁾。この法門は ⁽¹¹⁹⁾→ 文字が整っている点で善説なのです ←⁽¹¹⁹⁾。この法門は [Zh235] 究極的な真実 (勝義) を正しく説くことで利益を生じさせます。この法門は法を語る人たちによって捨てられることはありません。この法門は知を持つ人たちによって放棄されることはありません。この法門は財を求める人たちの蔵です。この法門は苦悩する人たちの苦悩をなくします。この法門は慈心に住する人たちに平等性を生じさせます。この法門は怠ける人たちに精進を生じさせます。この法門は正念を失った人たちに禅定を生じさせます。この法門は智慧が濁している人たちに [その智慧が] 輝くようにします。ブラフマー神よ、この法門にはすべての仏陀の法がしっかりと確立しているのです」

さて、その天子がこの法門の称讃を説いた時、この三千大千世界は六種に震動した。世尊は天子に「よろしい」と仰せになられた。

(XXXVI-4) ヴィマラケートゥ天子への授記

その時、ブラフマー神たるヴィシェーシャチンティンは世尊にこう申し上げる。「世尊よ、この天子はかつて、過去の正等覚者がたからこの法門を聞いたのでしょうか」

世尊が仰せになる。「ブラフマー神よ、この天子は六十四コーティ・ナユタもの仏陀からこの法門を聞いたのである。ブラフマー神よ、このヴィマラケートゥ天子は四百二十万劫後に、『ラトナヴァティー (宝のあるところ) ⁽¹²⁰⁾』という世界において、『ラトナヴィユーハ (宝の配列) ⁽¹²¹⁾』という名の如来として世に現れるであろう。[P100b] それまでの間、出現するすべての [Zh236] 仏陀に対して尊敬し、供養するであろう。それらの仏陀・世尊からこの法門を聞くであろう。ブラフマー神よ、比丘、比丘尼、男女の在家信者、神々、ナーガ、ヤクシャ、ガンダルヴァたちもまた、この法門に対する忍 (容認の知) を獲得し、彼らはすべてラトナヴィユーハ如来の仏国土であるラトナヴァティー世界に生まれるであろう」

その時、ヴィマラケートゥ天子は世尊にこう申し上げる。「世尊よ、私は悟りを求めず、願わず、喜ばず、執着せず、見ず、考えず、理解せず、考察することはありません。[そういう] 私に、どうして世尊は、授記なされたのでしょうか」

世尊が仰せになる。「天子よ、たとえば、ある人が、草、木、枝、葉、花卉を火に投げ込んでから、『草、木、枝、葉、花卉よ、燃えるな ⁽¹²²⁾』と言った場合、⁽¹²³⁾→ それが、その人の力に

(118) Tib: yi ge'i tshig nges(P: des) pas(T: pa'i) shin tu nges pa'i tshig go. Ch1: 善究竟成(誠), 次第美辭故. Ch2: 究竟善隨義説. Ch3: 究竟善巧隨義説故.

(119) Tib: 'bru 'brel pas legs par bstan pa'o(P: po'o). Ch1: 爲善應, 順隨其所入故. Ch2: 文辭次第善説. Ch3: 文辭次第, 善説法故.

(120) Tib: rin chen(NP: rin po che) ldan(*Ratnavatī). Ch1: 寶積(跡). Ch2: 多寶. Ch 3: 寶莊嚴.

(121) Tib: rin po che(CDHNP: rin chen) bkod pa(*Ratnavyūha). Ch1: 寶燦. Ch2: 寶莊嚴. Ch 3: 無垢莊嚴.

(122) BKLPhT: ma(B: mi) tshig shig(T: cig). CDHNP: ma tshig. Ch1: 勿燒. Ch2: 汝等莫然, 汝等莫然.

よって燃えない、ということはない←⁽¹²³⁾。天子よ、ちょうどそのように、菩薩が悟りを喜ばず、執着せず、見ず、欲せず、願わず、考えず、考察しなくても、⁽¹²⁴⁾→すべての仏陀が授記なされるのである←⁽¹²⁴⁾。天子よ、⁽¹²⁵⁾→意外なことであろうが←⁽¹²⁵⁾、悟りを喜ばず、執着せず、見ず、欲せず、願わず、考えず、考察しない菩薩に如来がたは授記をなさるのである」

(XXXVI-5) 五百天子への授記

その時、その集会において、[Zh237] 五百人ほどの天子たちが世尊に次のように申し上げる。「世尊よ、私たちが〔ヴィマラケートゥ天子と同じように〕悟りを喜ばず、執着せず、見ず、求めず、願わず、理解せず、考察してないのに、[P101a] どうして世尊は、私たちに、無上正等覚について授記をなされていないのですか」

その時、仏の威神力によって、上方の空中に、八万四千の仏陀たち〔の姿〕が見えた。それらの仏陀たちは彼らに無上正等覚への授記を与えた。

その時、その〔五百人の〕天子たちは世尊に次のように申し上げた。「世尊よ、如来が、『悟りを喜ばず、執着せず、見ず、欲せず、願わず、考えず、理解せず、考察もしない菩薩に授記をしよう』と、はっきりと仰せになられたことは素晴らしいこと（未曾有）です。世尊よ、私たちは、上方に八万四千の如来がたを見ているのですが、それらの如来がたはこぞって私たちに無上正等覚への授記を与えておられます」

(XXXVII-1) 明呪・マントラ句による法師の守護

その時、マンジュシュリー法王子が世尊に次のように申し上げた。「世尊よ、次のように加護（加持）なされるようお願い致します。後の時代、最後の五百年に、このジャンブドヴィーパにおいて、この法門が流布し、永く留まりますように。また、〔この法門が、精進という〕偉大な鎧を装着した良家の子や良家の子女の耳に届きますように。良家の子や良家の子女が魔のしわざによって生起し発生するものに [Zh238] 支配されませんように。彼らが、魔やその一族の神々に付け込まれることなく⁽¹²⁶⁾→この法門に護持（*parigraha）され偉大な鎧を装着して←⁽¹²⁶⁾無上正等覚を失うこと（*parihāṇa）がありませんように」

世尊が仰せになる。「マンジュシュリーよ、それ故、この法門が [P101b] 加護（加持）されて永く留まるために、<〔偉大な威徳をそなえた〕神々、ナーガ（龍）、ヤクシャ（夜叉）、ガンダルヴァ（乾闥婆）、アスラ（阿修羅）、ガルダ、キンナラ、マホーラガ、クンバーンダを呼

Ch3: 莫然, 莫然.

⁽¹²³⁾ Tib: de de'i dbang gis mi 'tshig pa ma(omitted in CDHN) yin no. Ch1: 令火不燒, 未之有也. 不用彼言而不焦燒 Ch2, 3: 若以是語而不然者, 無有是處.

⁽¹²⁴⁾ Tib: sangs rgyas thams cad lung ston te. Ch1: 一切諸佛則爲授決. Ch2, 3: 當知是人已爲一切諸佛所記.

⁽¹²⁵⁾ Tib: 'on kyang.

⁽¹²⁶⁾ Tib: chos kyi rnam grangs 'dis(KLT: 'di) yongs su bzung(PhT: gzung) zhing go cha(B: ca) chen po bgos te. Ch1: 以能受此經典要者. Ch2: 以受持是經故. Ch3: 以其受持是法門故. 異説によれば、3 漢訳と同じく「この法門を護持して～」となる、

び出すもの⁽¹²⁷⁾>というこの⁽¹²⁸⁾→明呪(*vidyā)・マントラ句(*mantrapada)←⁽¹²⁸⁾を説くので聞きなさい。この明呪・マントラ句を保持することによって、良家の子、良家の子女たる法師は、神々、ナーガ、ヤクシャ、ガンダルヴァ、アスラ、ガルダ、キンナラ、マホーラガ、クンバーンダたちによる保護(*parirakṣaṇa)を獲得する。〔この明呪・マントラ句は〕それらの良家の子・良家の子女たちが〔正しい〕道にいようと間違った道にいようと、〔人気のない所(*araṇya)]⁽¹²⁹⁾、僧房(*vihāra)、房舎(*layana)、経行所(*caṅkrama)、集会のどこにいようと守り、楽説(ひらめきに基づく説法*pratibhāna)を生じさせ、記憶(*smṛti)、知恵(*mati)、理解(*kalpanā)の力の生起に役立つのである。そのとき、異教の論者(外道)や敵対者たちに付け込まれることはないであろう。⁽¹³⁰⁾→自覚の念をもって←⁽¹³⁰⁾、立ち上がり、歩き回り、坐り、横になるであろう。

(XXXVII-2) 明呪・マントラ句

マンジュシュリーよ、その場合、それらの明呪・マントラ句とはどのようなものかと言えば、〔以下のとおりである〕⁽¹³¹⁾。

ud dhu re / dhu dhu re / man te / ca ti ma / go ca re⁽¹³²⁾ / śī la [Zh239] li / hi li mi li / thi li / thi mi li / hu lu hu lu hu lu / e bad te / be ta ṭe / kha kha re / kha re / kha ra ke / ā⁽¹³³⁾ san ne / ja ga ti / ma hi le / ma nu ṣa / ta ne ma na se⁽¹³⁴⁾→ ba ra gan dhe ←⁽¹³⁴⁾ / ⁽¹³⁶⁾→ sarba ru ti⁽¹³⁵⁾ ←⁽¹³⁶⁾ / ra bā⁽¹³⁷⁾ ba ga te⁽¹³⁸⁾ / sin dhu le / ⁽¹⁴¹⁾→ na mo bud⁽¹³⁹⁾ dhe⁽¹⁴⁰⁾ bhyaḥ ←⁽¹⁴¹⁾ / ⁽¹⁴²⁾→ ca di

(127) Tib: 'bebs pa. Ch1: 名曰選擇. Ch2, 3: 呪.

(128) Tib: rig pa dang sngags kyi tshig. Ch1: 神呪句義(神呪之句義). Ch2: 呪術(呪術章句). Ch3: 呪術章句.

(129) Ch1: 若在閑居. Ch2: 若在聚落. Ch3: 若在空閑. 藏訳はこの語を欠く.

(130) Tib: dran zhing(P: bzhin) shes bzhin du. Ch2, 3: 一心安詳.

(131) 明呪・マントラ句の部分は、版本系と写本系には大きく異なる部分が見られる。以下は、版本系のD版(=Zh本文)の読みを挙げ、同じく版本系(CHNP)の異読を注記するに留める。呪句に何らかの意味を読み取れる場合は、写本系(BKLPhT)や3漢訳(Ch1, 2, 3)を資料として訳を試みることにする。

(132) CHN: ri.

(133) CNP: a.

(134) 「選び抜かれた香りをもつものに」*varagandhe. Ch1に「袍提提(多香)」、Ch2に「婆曠乾地」とあり、これらは「多くの香りをもつものに」*bahugandheを支持する。

(135) P: te. HN: tri.

(136) 「すべての音をもつものに」*sarvarute. P版本と5写本によりtiをteに訂正。Ch1割注に「一切音」とある。

(137) CNP: ba.

(138) CHN: ti.

(139) HNP: bhud.

(140) P: dha.

(141) 「諸仏に帰依します」*namo buddhebhyaḥ.

ra^{←(142)} tre / (143)→ na mo dharmā ya ←(143) (144)→ nirga ta ni ←(144) / (147)→ na
 maḥ⁽¹⁴⁵⁾ saṃ⁽¹⁴⁶⁾ ghā ya ←(147) / (148)→ bā hi^{←(148)} ta pā pe / (152)→ byu pa
 śāntā⁽¹⁴⁹⁾ ni⁽¹⁵⁰⁾ / sarba pā pā⁽¹⁵¹⁾ ni ←(152) (154)→ mai tri⁽¹⁵³⁾ me ← (154) / (156)→
 sarba buddhe⁽¹⁵⁵⁾ bhyaḥ sa tya ni ra de śa brahma pa tho ←(156) / (160)→ mahā ṛ⁽¹⁵⁷⁾
 ṣi bhiḥ⁽¹⁵⁸⁾ / pra śāsta⁽¹⁵⁹⁾ ←(160) (163)→ ta⁽¹⁶¹⁾ tra ti ṣṭhan ti⁽¹⁶²⁾ / sarba bhu ta
 grā ha ←(163) / (166)→ na maḥ sarba buddhe⁽¹⁶⁴⁾ bhyaḥ sidhyantu me mantra ⁽¹⁶⁵⁾
 pa dā svā hā ←(166) /

マンジュシュリーよ、この明呪・マントラ句は、以下のような菩薩〔でありたいと願う
 者が唱えるべきものである。つまり、〕この法門に精励し、^{(167)→} 常に [P102a] 正念を保ち

(142) C: cangri.

(143) 「法に帰依します」 *namo dharmāya.

(144) *nirgatani. 意味は不明だが、Ch1 割注に「害除」とあり、煩惱などの障碍が無い (nirgata) ことを示唆する。一方、Ch3 は「尼伽 (長音而重) 婆尼 (長音)」とし、その原音が nirghoṣaṇī であったことを示唆する。この言葉は『法華経』では、nirghoṣaṇi の形で「大きな音を立てること、大声で述べ伝えること」の意で用いられているようである。SP: 「仏陀にみそなわされ、法によって吟味され、僧団によって唱えられる……マントラに……幸いあれ」 buddhavilokite dharmaparīkṣite saṃghanirghoṣaṇi...mante... svāhā. (397.6-397.2) PTSD では、nigghosa: “shouting out”, sound; fame, renown; speech, utterance, proclamation; word of reproach, blame と説明される。

(145) P: moḥ.

(146) P: soṃ.

(147) 「僧伽に帰依します」 * namaḥ saṅghāya.

(148) CNP: bha ha. H: bha hi.

(149) CNP: śata.

(150) H: nai.

(151) CNP: pa.

(152) 「あらゆる悪事が鎮まっています」 *vyupaśāntāni sarvapāpāni.

(153) HNP: tre. C: tra.

(154) 「私への慈しみ」 *maitrī me.

(155) CHN: bhu dhe.

(156) 「一切諸仏にとって真実を教示する聖なる道です」 *sarvabuddhebhyaḥ satyanirdeśabrahmapatho. Ch2: 一切衆生中慈説聖諦, 梵天所讚歎, Ch2 の下線部は sarvabuddhebhyaḥ ではなく sarvasattvebhyaḥ であった可能性がある。なお、この部分以降呪句の最後まで Ch2 は音訳の他に意識も示している。

(157) P: ri. CN: ru.

(158) CNP: bhi.

(159) pra śāsta は、諸写本により pra śasta に訂正 (KLT: pra śa sta. B: pra śa ste. Ph: pra śa stu).

(160) 「偉大な聖仙たちに称讃されています」 *maharṣibhiḥ praśastaḥ. Ch2: 諸賢聖所讚歎。

(161) CNP: tang.

(162) P: te.

(163) 「そこにはあらゆる鬼神がおられます」 *tatra tiṣṭhanti sarvabhūtagrāhāḥ. Ch2: 此中住召一切諸神。

(164) C: bhu dhi. N: bhu dhe. H: buddhe.

(165) H inserts: me man tra.

(166) 「一切諸仏に帰依します。どうか、私にとって〔これらの〕マントラ句が効力を発揮しますように」 *namaḥ sarvabuddhebhyaḥ sidhyantu me mantrapadāḥ svāhā. Ch2: 南無諸佛。當成就是呪術。 Cf. *ĀMM*: namo bhagavatām buddhānām. sidhyantu mantra-padāḥ svāhā. (13.15-16) *Suvp*: namo bhagavatyai sarasvatyai sidhyantu mantrapadāḥ svāhā. (48.5)

(*saṃpraajāna) ←(167), 浮ついた心(掉挙 *auddhatya*)がなく、驕慢さがなく、心に動揺がなく、日常の行動(**samudācāra*)が端麗であり、(168)→余分なものから離れ ←(168), 少欲知足であり、(169)→辺地に坐臥すること(**prāntaśayyāsana*)を喜び ←(169), (170)→[人との煩わしい] 交わり(**saṃsarga*)が少なく ←(170), 心身が遠離しており、慈悲の心を喜び、法を喜び信解し、真実の言葉に依拠し、人を欺かず、宴坐(**pratisaṃlayana*)を喜び、根源的な精神集中(如理作意**yoniśomanasikāra*)に励み、根源的でない精神集中からは離れ、頭陀行(**dhūtagaṇa*)や厳しい節制(**saṃlekha*)を喜び、得たことにも得ていないことにも平等な心を持ち、涅槃を目指し、輪廻に怖れ戦き、(171)→好ましいことにも好ましくないことにも心が平等であり、様々な想念から離れ ←(171), 身体と生命〔に対する執着〕を捨て、あらゆる物を〔実体として〕見ることなく、その行動も威儀も完全であり、戒律や〔感官の〕防御を喜び、[Zh240] 忍耐性(**kṣama*)・柔軟性(**sūrata*)に富み、乱暴な言葉にも耐える性質を持ち、精進に励み、どのようなことであろうとあらゆる有情のためにしなければならないことに精励し、微笑みを湛え(172), しかめっ面をせず(173), [相手の思いに] 先んじて話をし(**pūrvābhilāpin*), 高慢でなく、柔軟であり、共に楽しく過ごすことができる(**sukhasaṃvāsyā*), などというこのような振る舞い(**caryā*)に住し〔たいと望む〕良家の子、良家の子女は、マンジュシュリーよ、このマントラ句を唱えるべきである。マンジュシュリーよ、そのようであれば、〔彼らは〕法師(**dharmabhāṇaka*)として、そのとき、まさにここにおいて(174), <力の生起の十(175)>を獲得する。

十とは何かと言え、(1) 忘れないという特性をもつが故に念の力を生じること、(2) 法の考察(**pravicaya*)に巧みであるが故に知恵(**mati*)の力を生じること、(3) 經典の趣意(**naya*)に通じるが故に理解の力を生じること、(4) (176)→ 防御(**saṃvara*)と〔積極的〕行動(**caryā*)とを捨てないが故に信(**śraddhā*)の力を生じる ←(176)こと、(5) 自と他とを守るが故に慚愧の力を生じること、(6) 智慧を完備する(**paripūrṇa*)が故に聞く力を生じること、(7) 聞いたことを [P102b] 全て保持するが故に記憶(**dhāraṇī*)の力を生じること、(8) 仏の加護(加持)によって守られているが故に樂説(障礙のない弁舌)の力を生じること(9) 五神通を獲得するが故に甚深なる力を生じること、(10) 速やかに一切知者の知を

(167) Tib: rtag tu shes bzhin dang ldan pa. Ch1: 則爲已(以) 安詳(祥) 尋後將護. Ch2: 應一心行. Ch3: 當誦持之應一心行.

(168) Tib: stsoḡs(CLT: sogs) pa dang bral ba. Ch1: 造次第行. Ch2, 3: 不畜餘食.

(169) Tib: bas mtha'i gnas mal(P: lam) la mngon par dga' ba. Ch1: 臥寐寂寞. Ch2, 3: 獨處遠離.

(170) Tib: 'du 'dzi nyung ba. Ch1: 樂於澹泊不習多事. Ch2, 3: 不樂憤鬧.

(171) Ch1: 親友(及, 愛) 怨讎(仇) 等心加之棄衆想念. Ch2: 等心憎(增) 愛離別異相. Ch3: 等心憎愛和合離別.

(172) Tib: bzhin 'dzum pa. Ch1: 面目和悅. Ch2, 3: 顔色和悅.

(173) Tib: khro gnyer dang bral ba. Ch1: 離於憔悴無惡顔色. Ch2: 無惡姿容.

(174) Tib: 'di nyid la. Ch1: 現. Ch2: 即於現世. Ch3: 即現身中.

(175) Tib: stobs bskyed pa bcu(*daśabalādhāna).

(176) Ch1: 堅固之力行在生死. Ch2: 得堅固力行生死故. Ch3: 得堅固力以常不捨如實修行.

完備するが故に無生法忍の力を生じることである。マンジュシュリーよ、〔先に述べたような〕振る舞い (*caryā) の中であってこの明呪・マントラ句を唱える法師は、この十の力の生起を獲得するであろう」

(XXXVII-3) 四天王による守護

世尊がこの明呪・マントラ句の教説を語られた時、四天王たちは、恐怖のあまり毛が逆立ち (*bhayaromahaṛṣa), 何十万もの多くの眷属とともに [Zh241] 世尊のところに参上し、参上すると、かの世尊の足に頭をつけて礼拝合掌し、かの世尊にこう申し上げた。「世尊よ、私たち四天王は、〔悟りに向かう〕流れに入って（預流果を得て）おり、如来のお言葉を成就する者です。もし、良家の子や良家の子女であって、法師 (*dharmabhāṇaka) や法の教示者 (*dharmaśāstṛ) として、このような（これまで説明されてきた）この経典を護持し読誦するならば、世尊よ、私たち四天王が、友人・親族や取り巻きたち（眷属）とともに、彼らを守護し、警護し、護衛致します。彼らがいるところが、村であれ、町であれ、国であれ、地方であれ、〔また、彼らが〕在家であろうと、出家であろうと、世尊よ、私たち威力ある四天王は、眷属とともに、彼ら良家の子、良家の子女たちに、喜んで奉仕致します。〔彼らが〕他から危害を加えられることなく、迫害されることがないように、喜んで守護し、警護し、精励し、〔自らの〕姿を現します。世尊よ、この法門が広く流布しているところでは、百ヨージアナ以内において (*yojanaśātāt) ⁽¹⁷⁷⁾, ⁽¹⁷⁸⁾→ 神々、ナーガ、ヤクシャ、[P103a] クンバーンダによって付け込まれることはありません ←⁽¹⁷⁸⁾。

その時、ヴィルーダカ（増大する者 Virūdhaka）大王（増長天）は、以下の詩頌を述べた。

- 1 私には息子、友人・親族、召使い、取り巻きたち（眷属）がいますが、彼らと私たちがそれぞれ友人を伴って、⁽¹⁷⁹⁾→ 彼ら指導者（法師）たち ←⁽¹⁷⁹⁾に奉仕致します。

その時、ヴィルーパークシャ（多彩な色の眼をもつ者、変わった形の眼をもつ者 Virūpākṣa）大王（広目天）は、以下の詩頌を述べた。

- 2 私は法王 (*dharmrāja) の息子であり、法から生まれた法の化身です。悟りへと [Zh242] 向かうあなたの息子たちに奉仕致します。

その時、ドゥフリタラーシュトラ（領国を保持する者 Dhṛtarāṣṭra）大王（持国天）は、以下の詩頌を述べた。

- 3 仏が説かれたこの経典を保持する人（法師）たちは、十方のどこにおいても、私が守護

(177) Ch1: 面四十里。Ch2: 面五十里。Ch3: 其方面百由旬。

(178) Ch1: 諸天龍神鳩渥眷屬子孫無得其便。Ch2, 3: 若天天子, 若龍龍子, 若夜叉夜叉子, 若鳩槃荼鳩槃荼子等不能得便。

(179) Tib: bdag po de dag. Ch1: 此聰達。Ch2, 3: 是法師。

致します。

その時、ヴァイシュラヴァナ（名声を持つ者（ヴィシュラヴァナ神）の息子 Vaiśravaṇa）大王（多聞天，毘沙門天）は、以下の詩頌を述べた。

- 4 悟りに向けて精励する人（法師）たちに相応しい供養をすること、それはすべての有情にできることではありません。

(XXXVII-4) サットヤチャンドラの誓願と彼への授記

その時、ヴァイシュラヴァナ大王の息子であるサットヤチャンドラ（真実の月）⁽¹⁸⁰⁾は、世尊に対して、七宝の傘蓋（パラソル）を捧げて、以下の詩頌を述べた。

- 1 私こそがこの法門を如来から受持し、他に対して説きます。私の志とはこのようなものです。
- 2 世尊は、私の心と過去の行いがどのようなものであるかをご存知です。⁽¹⁸¹⁾→ 私は、自分の発心の通りに、世間の人々を導きます ←⁽¹⁸¹⁾。
- 3 無量の〔人々の〕救済者たる仏陀に対してこの傘蓋を捧げることにより、私は、あなたのような、⁽¹⁸²⁾→ 頭頂が見られることのない ←⁽¹⁸²⁾聖者（牟尼）になるでしょう。
- 4 ⁽¹⁸³⁾→ 正しき人たる仏陀が私に対する慈しみの心から見ていただくことで ←⁽¹⁸³⁾、〔私は〕清浄な眼を獲得し、勝者たるアジタ（弥勒）^{まみ}に見えることになるでしょう。
- 5 その知が究極に至っておられる教主（世尊）はその時、予言をなされました。「汝は、これより後の時に、トゥシタ（兜率天）に [P103b] 生まれるであろう。
- 6 トウシタより死没（下生）して、勝者たるマイトレーヤ（弥勒）に見えるであろう。二万劫の間⁽¹⁸⁴⁾、供養をして出家するであろう。
- 7 汝は、出家して後、[Zh243] 梵行を実践し、この賢劫に出現しておられる指導者（仏陀）たちに見えることであろう。
- 8 すべて〔の仏陀がた〕に供養し、梵行を実践してから六億劫⁽¹⁸⁵⁾の後に、汝は仏陀とな

⁽¹⁸⁰⁾ Tib: bden pa'i zla ba(*Satyacandra). Ch1: 諦願. Ch2: 善寶. Ch3: 善實.

⁽¹⁸¹⁾ Tib: ji ltar bdag gi(KL: gyis) sems 'dud(L: bdud) pa // bdag ni jig rten rnam(HN: rnames) dren gyur (KLPh: 'gyur) // Ch1: 如意之所建 於世當成佛. Ch2: 從初所發意 至誠求佛道. Ch3: 初始發道心至誠求佛道.

⁽¹⁸²⁾ Cf. LV: 「[如来は]」世間〔にあるもの〕をすべて凌駕しているので、頭頂を見られることがない人と言われる」 anavalokitamūrdha ity ucyate sarvalokābhyudgatatvāt. (307.21)

⁽¹⁸³⁾ Tib: sangs rgyas skyes bu dam pa yang // bdag gi(KLPhT: gis) byams pas bltas pa yis // Ch1: 正覺唯來(采) 阿人(世) 尊重慈心. Ch2: 我以愛敬心 瞻仰於世尊. Ch3: 願二足之尊慈悲觀察我. 訳文は5版本とB写本の読み (bdag gi) に従っているが、これは内容的には Ch1, 3 に近い。4写本の読み (bdag gis) では見る主体は「我」になり、Ch2 と同内容になる。

⁽¹⁸⁴⁾ Tib: bskal pa stong phrag nyi shur ni. Ch1, 2, 3: 二萬歲.

⁽¹⁸⁵⁾ Tib: bskal pa bye ba drug cu na. Ch1,2,3: 六十億. bye ba(*koṭi) は一千万だが、漢訳はコーティを

るであろう。

- 9 その仏国土はよく整えられ（莊嚴され）ている。『宝石の傘蓋』（という名のその仏国土）において、菩薩に対してのみ、汝は法を説くであろう。
- 10 寿命は一劫であろう。〔汝が〕入滅しても、有情たちを利するために、正法は清浄なまま半劫のあいだ留まるであろう⁽¹⁸⁶⁾と。

(XXXVII-5) シャクラ神による守護

その時、神々の主であるシャクラは、何十万もの無数の眷属とともに、世尊に対してこう申し上げた。「世尊よ、私は、この經典を護持する法師たちを守護し、警護致します⁽¹⁸⁷⁾。供養し、奉仕致します。この法門が文字に書かれたり読誦されたりする場合には、必ず、その法師の力、威力〔が増し〕、法が淀みなく楽説されるよう、私は眷属とともに法を聞きに参ります」

(XXXVII-6) シャクラ神の子・ゴーパカによる誓願と彼への授記

その時、神々の主・シャクラの息子であるゴーパカ（*Gopaka）⁽¹⁸⁸⁾は、あらゆる宝石で飾られた首飾りを如来に捧げて、以下の詩頌を述べた。

- 1 牟尼よ、⁽¹⁸⁹⁾→ 私にはこのことがはっきりと見えています ←⁽¹⁸⁹⁾。あなたがかつて行なわれたように、私もまた仏陀の知を求めて〔それを〕成就致します。
- 2 かつて、あなたは施与せず放棄しないということはありませんでした。すべての財産を放棄なされましたが、私はそれを見習いたいと思います。
- 3 あなたのこの經典は、世間の守護者（仏陀）から直接授かったものです。〔人々に〕繰り返し [Zh244] 繰り返し説きます。指導者よ、〔私は〕あなたに恩返しを致します。
- 4 この經典を喜ぶ人たちは、私にとっては [P104a] 教主（仏陀）と同じです。私は仏陀の法を求めているのですから、彼〔ら〕に常に奉仕致します。
- 5 正法を護持することは守護者（仏陀）の弟子（声聞）には不可能です。後のとても恐ろしい時代に、私は〔この經典を〕守護致します。
- 6 守護者よ、私にも確信（安心）をお与え下さい。〔私をはじめとする〕神々の疑念を断つて下さい。牟尼・牛王（*ṛṣabha）よ、どれほどの時間が経てば、あなたのようになるのでしょうか。

「億」と訳す。

(186) Ch1, 2: 正法住半劫。Ch3: 正法住一劫 像法住半劫 清淨勝妙法。

(187) Cf. *SP*: 「私もまた世尊よ、多くの人の幸福のためにダーラニー句を述べましょう。そのような法師たちや、そのような經典の受持者たちを守護し、警護し、護衛するために、ダーラニー・マントラ句〔を述べましょう〕」*aham api bhagavan dhāraṇīpadāni bhāṣiṣye bahujaṇahitāya. teṣāṃ ca tathārūpāṇāṃ dharmabhāṇakānāṃ evaṃrūpāṇāṃ sūtrāntadhāraṇāṇāṃ rakṣāvāraṇaguptaye dhāraṇīmantrapadāni.* (399.7-9)

(188) Tib: *sbed*(B: spang, L: sbid) byed. Ch1: 瞿或(瞿或, 瞿夷). Ch2: 劬婆伽. Ch3: 善護。

(189) Tib: *bdag 'dir mngon sum ste.* Ch1: 我目觀. Ch2: 我常現了知. Ch3: 我常如實知。

- 7 一切知者の知に通曉なさっておられるスガタ（善逝）はこの〔私に〕予言なされました。
「私と同じように、汝もまた完全に悟った者（仏陀）となるであろう。
- 8 千コーティ劫、百コーティ劫を過ぎて、世間において『知の生起⁽¹⁹⁰⁾』という名の仏陀となるであろう。
- 9 ⁽¹⁹¹⁾→ 寂靜なる悟りを獲得し、諸魔を降伏してのちは、百千コーティもの有情（人々）を悟りに立たせるであろう ←⁽¹⁹¹⁾」と。

(XXXVII-6) ブラフマー神による守護

その時、サハー世界の主であるブラフマー神（梵天）は、世尊に向かって次のように申し上げた。「世尊よ、私は〔いつも〕禪定に入っていますが、それを捨てて、この法門を正しく説いている良家の子あるいは良家の子女のもとに、法を聞きに参ります。なぜなら、シャクラ神もブラフマー神もこの〔法門〕から生まれたからです。世尊よ、私は、それらの良家の子あるいは良家の子女に対して、喜んで敬意を表し奉仕致します。彼らは神々を含む世間から奉仕され尊敬されるに相応しいのです」

その時、サハー世界の主であるブラフマー神は、世尊に向かって以下の詩頌を述べた。

- 1 出家の男女でも [Zh245] 在家の男女でも、およそこの法門を保持する人は、全ての人にとってのチャイトヤ（供養塔）なのです。
- 2, 3 もし、ある一人の有情がこの經典へと導かれるならば、それは、世界の主たる私にとって喜ばしいことです。彼らが法師としてこの經典を説くために椅子に坐っている時に [P104b]、その椅子にブラフマー神の世界に至るまで花を振りかけることは私にとって喜ばしいことです。
- 4 後の〔恐ろしい〕時代に、この經典をある人から直接⁽¹⁹²⁾聞くことがあるならば、その人に対して、〔私は〕「ああ、よく語られた。素晴らしい」と言います。
- 5 この經典が存在している所に火の塊が充満していても、何コーティもの国土を越えて、⁽¹⁹³⁾→ 聴聞を求めて参ります ←⁽¹⁹³⁾
- 6 スメル（須弥山）ほどの宝石の塊を歡喜しつつ捧げ、仏道を淨化するこの經典を聴聞致します。

(XXXVII-7) マーラ・パーピーヤスによる守護

⁽¹⁹⁰⁾ Tib: ye shes 'byung. Ch1: 慧成就. Ch2: 智王. Ch3: 智成.

⁽¹⁹¹⁾ この詩頌は藏訳のみ.

⁽¹⁹²⁾ Tib: lag nas. Ch1: 手執此經.

⁽¹⁹³⁾ Tib: skyo(C: sgyo) mi 'tshal bar(BC: ba) mchi bar bgyi. Ch1: 求還(速)聞斯典. Ch2: 往聽如是經. Ch3: 往聽是法門. この部分は漢訳を優先した. 藏訳は「疲倦 (*khinna) を求めることなく行く」の意になり文脈に合わない.

さて、世尊は、その時、以下のような神通を発揮なされた。発揮なされたその神通どおりに、マール・パーピーヤス（魔波旬）は四つの軍勢を従えて、世尊のところに参上した。参上して、世尊の両足に頭をつけて礼拝し、世尊にこう申し上げた。「世尊よ、私は、わが軍勢・眷属とともに、世尊の御前でお誓い申し上げます。この法門が流布するところでは、法を聞く者や法を説く者に魔の仕業が起きないようにし、さらに〔彼らを〕守護し、警護し、護衛致します」

(XXXVII-8) 如来の加護（加持）

その時、世尊は、金色の如き光によってこの仏国土（サハ世界）を覆い、法王子であるマンジュシュリーにこう [Zh246] 仰せになられた。「マンジュシュリーよ、正法を護持する正しい人（法師）たちの正法を護持するために、如来はこの法門を加護（加持）するのである。マンジュシュリーよ、この法門がこのジャンブドヴィーパ（閻浮提）において行われる限り、その間、正法が消滅することはないであろう」

その時、集会にいたすすべての人たちは、喜び、歓喜し、満足して、あらゆる香料、あらゆる花輪 [P105a]、あらゆる塗香、あらゆる華、あらゆる粉香を如来に向かって散布して、次のように言った。「どうか、この法門がジャンブドヴィーパに永く止まり、普及しますように」

(XXXVIII) 法の委嘱

その時、世尊は、具寿アーナンダに仰せになられた。「アーナンダよ、汝はこの法門を護持しますか」

〔アーナンダが〕申し上げる。「世尊よ、護持致します」

世尊が仰せになる。「アーナンダよ、では、この法門を護持し、保持し、読誦し、正しく教示するように、汝に委嘱しよう」

〔アーナンダが〕申し上げる。「世尊よ、この法門を保持し、あるいは護持し、あるいは読誦し、あるいは他に教え、あるいは文字に書かれたものを供養するならば、それは、どれほどの功德を生むのでしょうか」

世尊が仰せになる。「比丘の集団を従えた如来に対して、この法門が教示されるのに用いられている文字や語句と同じ数の心地よい品物をすべて供養するよりも、[Zh247] この法門を保持し護持して他の人々に教え読誦する方が、はるかに多くの功德を生じさせる。アーナンダよ、誰かある人が、正法が永く止まるようにと、この法門を書物に書いて供養するならば、その人は、⁽¹⁹⁴⁾→ まさにこの時（現世）において ←⁽¹⁹⁴⁾、＜蔵を獲得する十＞⁽¹⁹⁵⁾を得る。十とは何か、たとえば、（1）仏陀の眼（仏眼）⁽¹⁹⁶⁾を得ることによって仏陀に見えるという蔵、（2）天耳を得ることによって法を聞くという蔵、（3）⁽¹⁹⁷⁾→ 退転することのない僧団 ←⁽¹⁹⁷⁾

(194) Tib: 'di nyid la. Ch1: 現在. Ch2: 現世. Ch3: 現.

(195) Tib: gter 'thob pa bcu. Ch1: 十蔵. Ch2: 十一功德(十徳)之蔵. Ch3: 十一功德(十徳, 十一徳)之蔵.

(196) Ch1, 2, 3: 天眼.

(197) Ch1: 不退轉菩薩賢聖(聖賢). Ch2, 3: 不退轉菩薩僧.

を得ることによって僧団を見るという蔵、(4) 宝の手 (*ratnapāṇi) を得ることによる尽きることのない財物という蔵、(5) 優れた〔仏陀の〕特徴(三十二相)と付属的な特徴(八十種好)の完成による色〔身〕という蔵、(6) 眷属を分断しないことによる [P105b] 眷属という蔵、(7) 陀羅尼(保持する力)を得ることによる聞〔法〕という蔵⁽¹⁹⁸⁾、(8) 楽説(弁才)を得ることによる正念という蔵、(9) 異教の論者(外道)を撃破することによる無畏という蔵、(10) すべての有情を養うことによる福德という蔵である。〔一切の諸仏の法を得ることによる智慧の蔵である〕⁽¹⁹⁹⁾」

さて、世尊がこの法門を説かれた時、七十二ナユタ〔もの多数の〕菩薩は、無生法忍(法は本来生じることがないという容認の知)を獲得した。無数の有情は悟り〔への心〕を確立した。また、無数の有情は煩惱(漏)が尽きて〔その心は〕解脱した。

その時、具寿アーナンダは世尊に対してこのように申し上げた。「世尊よ、この法門の名は何でしょうか。これをどのように護持するのでしょうか」

世尊が仰せになる。「アーナンダよ、それゆえ、汝は、この法門の名を『あらゆる法の集成』、[Zh248] 『仏陀の莊嚴』、『ブラフマー神であるヴィシエーシャチンティンの問い』、『マンジュシュリーの教え』として護持しなさい」

世尊がこのように仰せになられたると、法王子であるマンジュシュリー、ブラフマー神であるヴィシエーシャチンティン、偉大なサーラ樹のごときバラモンの子であるサマターヴィハーリン、ジャーリニープラバ菩薩、大徳マハーカーシャパ、具寿アーナンダ、十方から来集してきた菩薩たち、偉大な声聞たち、神々・人間・非人・ガンダルヴァを含む世間の人たちは、世尊の語られた〔ことば〕を喜び、讃嘆した。

「ブラフマー神であるヴィシエーシャチンティンの問い」という聖なる大乘經典が完結した。

(202)→ インドの学匠であるシャーキャプラバ(Śākyaprabha)とダルマパーラ(Dharmapāla)とジナミトラ(Jinamitra)、翻訳主官であるダルマターシーラ(Dharmatāśīla)、[P106a]校訂官であるデーヴェンドララクシタ(Devendrarakṣita)⁽²⁰⁰⁾とクマーララクシタ(Kumārarakṣita)⁽²⁰¹⁾等が、翻訳し、校訂したものを〔文字にして〕確定した。←(202)

(198) Ch1: 無間寶藏. Ch2: 所未聞法藏. Ch3: 聞所未聞諸法之藏.

(199) この部分は3漢訳に見られる。十一番目の蔵というより、十の蔵の内容を総括したものであろう。

(200) BKLTによれば、デーヴェンドラシーラ(Devendraśīla)。

(201) BKLTによれば、クマーラシーラ(Kumāraśīla)。

(202) この部分を Ph は欠く。

<一次文献・略号> (校訂テキスト)

- Bhk* *Bhāvanākrama: Minor Buddhist Texts Part III Third Bhāvanākrama*, Giuseppe Tucci(ed.). Serie Orientale Roma XLIII, Roma, 1971.
- BP* *Brahmaviśeṣacintipariṣcchā*.
- Divy* *Divyāvadāna*, Edited by P. L. Vaidya, BST No.20, Darbhanga, 1959.
- Gv* *Gaṇḍavyūhasūtra*, Edited by P. L. Vaidya, BST No.5, Darbhanga, 1960.
- Jā* *The Jātaka together with its Commentary, being Tales of the Anterior Births of Gotama Buddha*, ed. by V. Fousbøll, 7 vols., Pali Text Society, 1964.
- KP* *Kāśyapaparivarta*, A. von Staël-Holstein (ed.), Shanghai, 1934; *The Kāśyapaparivarta Romanized Text and Facsimiles*, M.I. Vorobyova-Desyatovskaya (ed.), Tokyo, 2002.
- LV* *Lalitavistara*, Edited by P. L. Vaidya, BST No.1, Darbhanga, 1958.
- SP* *Saddharmapuṇḍarikasūtra*, Kern and Nanjo (eds.), St.Petersburg, 1912.
- Suwp* *Suvarṇaprabhāsasūtram*, edited by P. L. Vaidya, BST No.8, Darbhanga, 1967.
- VKN* *Vimalakīrtinirdeśa, Transliterated Sanskrit Text Collated with Tibetan and Chinese Translations*, Edited by Study Group on Buddhist Sanskrit Literature, The Institute for Comprehensive Studies of Buddhism, Taisho University, 2004.

<二次文献・略号> (辞書・索引類)

- AD* *The Practical Sanskrit-English Dictionary*, by Prin. Vaman Shivaram Apte, Revized & Enlarged Edition, Kyoto, 1978.
- Mvy* *Mahāvīyūtpatti*: 『梵藏漢和四譯對校・翻譯名義大集』鈴木學術財団, 1916.
- TSD* *Tibetan Sanskrit Dictionary*, ed. by Lokesh Chandra, New delhi, 1959; 臨川書店, 1982.

<三次文献> (論文・著書)

- 一郷正道 [2011]: 『瑜伽行中觀派の修道論の解明—『修習次第』の研究—』2008年度2010年度科学研究費補助金 基盤研究 (C) 成果報告書 (課題番号 20520049) .

- 氏家覚勝 [1987]: 『陀羅尼思想の研究』東方出版, 新装版: 2017 年.
- 五島清隆 [2009]: 「チベット訳『梵天所問経』—和訳と訳注(1)」『インド学チベット学研究』 # 13, 141-184 頁.
- [2010]: 「チベット訳『梵天所問経』—和訳と訳注(2)」『インド学チベット学研究』 # 14, 89-125 頁.
- [2011]: 「チベット訳『梵天所問経』—和訳と訳注(3)」『インド学チベット学研究』 # 15, 196-230 頁.
- [2012]: 「チベット訳『梵天所問経』—和訳と訳注(4)」『インド学チベット学研究』 # 16, 124-155 頁.
- [2013]: 「チベット訳『梵天所問経』—和訳と訳注(5)」『インド学チベット学研究』 # 17, 87-118 頁.
- 陳景榮 [2001]: 「《思益經》「七邪法」初探」『中華佛學研究』第五期, 2001 年, 57-73 頁.
- Eckel, Malcolm David [2008]: *Bhāviveka and His Buddhist Opponents*, Harvard Oriental Series, No. 70 .
- Katsura, Shoryu [2015]: ‘Kumārajīva, Bhāviveka and Candrakīrti on “Seeing without seeing”’, International Workshop on Bhāviveka vs. Candrakīrti (August 26-28, 2015, at Sanjo Conference Hall, Univ. of Tokyo).

An Annotated Japanese Translation of the Tibetan Version of the *Brahmaparipṛcchā* (6) [Final Portion]

Summary

At the end of the preceding volume (*bam po*), when Devaputra Avaivartika taught what the “Lion’s roar (*siṃhanāda*)” was, there arose the six kinds of vibration of the whole universe, which made the Buddha smile. When he smiled, a seven-colored light was emitted from his mouth. It circled around him three times and finally disappeared into the top of his head. This indicates that he would predict someone to attain Buddhahood in the future.

The sixth volume begins with a question asked by Brahmā Viśeṣacintin about the reason for the Buddha’s smile. The Buddha replies to this question and predicts that Devaputra Avaivartika will attain Buddhahood. Devaputra Avaivartika talks to Brahmā Viśeṣacintin about “the strong armor of exertion/diligence (*vīryadṛḍhasaṃnāha*)”. In other words, it is “an action without action”. The Buddha practiced it in his former life and was

predicted by Tathāgata Dīpaṅkara to become the Buddha Śākyamuni. Mahākāśyapa hears the dialogue between Devaputra Avaiartika and Brahmā Viśeṣacintin and thinks that teaching *bodhisattvas* about a *bodhisattva* is compared to rain showered by great Nāgas. The Buddha explains the good qualities of a bodhisattva in detail by using the metaphor of the ocean.

Afterwards Viśeṣacintin, Mañjuśrī and Devaputra Vimalaketu talk about “an action without action”, especially “hearing without hearing (*aśravaṇayogena śravaṇam*)”. In other sections of this *sūtra*, there are similar expressions. For example, in sec. XVIII-2, “As long as one sees, one sees falsity, and one who does not see sees the truth.” In sec. XX-2, “If one does not take any action, one acts rightly”. And in sec. XXV, “[A *bodhisattva*] does not see anything because he has detached himself from dichotomy. Non-seeing is right seeing”. These expressions influenced other Mahāyānasūtras such as the *Dharmasaṅgītisūtra* and Mādhyamika scholars such as Bhāviveka.

Viśeṣacintin, Mañjuśrī and Devaputra praise how splendid this *sūtra* is and express their strong determination to make it widely known and popular among people. Devaputra Vimalaketu declares: “If someone listens to even a small part of this teaching (*dharmaparyāya*), I will give him a certification to become a *buddha* in the future, even if he has not obtained it from the Buddha”. With these words he himself is given certification by the Buddha because he has neither hoped for nor taken any action to become a *buddha*. He practised “action without action” without thinking.

Hoping that this *sūtra* will last forever, Mañjuśrī asks the Buddha to take effective measures. In return, the Buddha teaches the great spells (*vidyāmantrapada*) which protect the preachers or teachers (*dharmabhāṇaka*) of this *sūtra*. Four Heavenly Kings (*lokapāla*) marvel at the Buddha’s words and promise to protect them. Śakra, Brahmā, and Māra Pāpīyān also promise to protect them. Towards the end of this *sūtra*, the Buddha appoints Ānanda to uphold the *sūtra* to make it widely known in the world.

< キーワード > 七邪法, adarśanayogena, aśravaṇayogena, kācamaṇi, dharmabhāṇaka, vidyāmantrapada, Mañjuśrī, Viśeṣacintin, Vimalaketu, Satyacandra, Gopaka